
ガンホー・ラヴ！

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンホー・ラヴ！

【Nコード】

N1873F

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

恋する高校生、金池文太の日常と、ステレオタイプすぎて新鮮なキャラクター達が贈る、ハイスクールコメディ学園青春喜譚

act 1 恋する少年 1

取り立てて理由もなく恋をした。

強いて理由を挙げようにも、本当に理由がない。たまたま廊下ですれ違ったり、下校の電車で同じ車両になったりを繰り返しているうちに好きになってしまった。

取り立てて美人、というわけでもない。特別な何かを持っているわけでもない。少なくとも、端から見ている分には、少し地味な、隣のクラスの女子でしかなかった。

自分の隠れた好みの発露であったのかもしれない。気の迷いなのかもしれない。ただ、揺れ動いてしまった気持ちは如何^{いかん}ともし難^{がた}く、その感情を持て余し続けるうちに、いよいよどうしようもないぐらいに彼女を好きになってしまった。

名を、高山^{たかやま}優子^{ゆうこ}という。身長およそ155cm。肩口まで届くセミロングの黒髪と、なんとなくぼんやりとした目。小さな鼻に小さな口。若干細めの足だけは、少し俺好みである。

成績も中の上。友達もそこそこいる。

別に何が悪いわけでもないが、地味で、目立たない、なんか脇役みたいな女の子なのである。

何故かウチの学年には、学校のアイドルとかいう時代錯誤^{じだいさくご}な存在がいるし、アイドルと比べると、なんだか可哀相になるぐらい地味なのだが、俺はアイドルではなく、ユウコに惚れてしまった。最近ではユウコで頭がいっぱいでアイドルの名前を忘れてしまったほどである。

まあ、何はともあれ、ユウコに恋をした俺は、だからといってアプローチをかけるわけでもなく、ラブレターをせっせと綴^{つづ}るわけでもなく、恋をする以前と何ら変わらない生活を送っていた。

決して、諦めようとか、無理だとか、ネガティブになっていたわけではない。

単純に声をかけられなかっただけである。

ドラマや映画のように、突発的なアクシデントで知り合ったりできるわけでもなく、ただ、一日に一度顔を見られればラッキー。そんな生活を繰り返していた。

もどかしさが恋に拍車をかけ、そうなればなるほど、気恥ずかしさや、拒否される不安が生まれて、にっちもさっちもいけなくなつた。

いっそ、友達にでも相談してみるか。

そう思っているうちに、高校一年が終わってしまった。普段なら嬉しいばかりの春休みも、ユウコの顔を見ることが出来ないと考え、途端に無為な日々となり、せめて時間が早く過ぎるようにと、課題をクリアし、余った時間をバイトに割り当て、あまつさえ母親の家事を手伝い、妹の日課であるポチの散歩を勝手にこなした。

結果、春休みが明ける頃には、成績と家事能力と、ポチの友情度が若干上昇して、小金が手に入った。

かくして高校二年生になり、ようやくユウコを眺めることが出来るのだと、喜び勇んで登校して、妙に校門が騒がしいことに気付いた。

掲示板に大きい模造紙が何枚も貼られており、生徒が蟻のようにそれに群がっている。

はて、なんだろうと近寄って、ようやくクラス替えがあることに気がついた。

断っておくが、クラス替えが何たるかは知っている。それに気付かなかつたのは偏にユウコひとえのことで頭がいっぱいで、それを打ち払うために課題をこなし、バイトをして、家事を手伝い、ポチの散歩をして、何も考えないでいたためである。

俺は奇しくも、ユウコと同じクラスになれるという可能性を完全に見過ごしていたことになる。

「なんてこった」

慌てて人混みをかき分け、2・Cで自分の名前をみつけて、とり

あえず深呼吸。次に、2 - Cの女子のほうに目を向け、慎重に「高」の文字を探した。該当者が二人いて、思わず卒倒しそうになるのを堪え、次に続く文字が「山」であることを神に祈った。

ニーチエの神は死んだらしいが、俺の神は生きていた。

「ひゃっほう！」

思わず右拳を高々と突き上げ、俺は神に感謝することも忘れて、偶々（たまたま）隣にいた生徒に抱きついた。そのままずっとツイストダンスを踊り、フライングクロスチョップを喰らわして、ようやく平静を取り戻したのである。

「よお、おはようさん」

ふと声をかけられて隣を見る。少し顔の変形した友人、大塩信が
おおしおまこと
にやりと口元を歪めて立っていた。

「どうした大塩。笑える顔だぞ」

「それはてめえがフライングクロスチョップを喰らわしたからだろうが」

「ああ、そんなこともあったな。で、どうしたんだ？」

「いや、友達を見かけたら普通、声をかけるだろ。まあ、お前がにやにやしてたから、珍しいと思っただけ」

にやにやしていたのか。まあ、ユウコと同じクラスだと考えれば、頬が緩むのも仕方がない。あまつさえ、隣の席になれるかもしれないとか考えると、もうそれだけで幸せなのだ。

「……ははあ、なるほど。小早川さんだな」
こはやかわ

大塩が一人、したり顔で笑う。小早川さん。誰だそいつ。

「まあ、我らが陽桜高校のアイドルだもんな。同じクラスになれただけで嬉しいのもわかる。俺も正直、笑いが止まらん」

「ああ、あのアイドル、小早川というのか。あと、お前同じクラスだったんだな」

小早川とやらなど、正直どっちでもよかった。美人だし性格も良いらしいし、おまけに成績優秀スポーツ万能と、とってつけたような存在なのだが、ユウコが脳内の八割を占める俺にとっては背景と

大して変わらない。

「お前、ほんとそういうの興味ないよな。駄目だぞ、青少年が恋の一つでもしないでする」

大いにしているのだが、この大塩はどうしようもなく口さがないので、絶対に言わないようにしている。

「ま、どうせ俺らじゃ相手になんかされないだろうけどよ、優しいし、声ぐらいならかけられるだろ。いやあ、それだけで喜ぶのもアレだけど、なんかいいよなあ」

俺に至ってはユウコと同じクラスというだけで嬉しい。声なんかかけられたら失神するかもしれない。一瞬横顔を眺めるだけで、動悸が収まらなかったほどだから、ちょっと不安だ。

「ようし、俺、ちょっと寂しそうな顔しところ。そしたら、小早川さん、声をかけてくれるかもしれん」

「その前に、顔が歪んでるから心配されると思うぞ」

「おお、確かに。痛かったけど、こりや役得だぜ。さんきゅ、金池かないけ」
人を殴って喜ばれたのは生まれて初めてである。しかし、大塩もなかなか根性が腐っていて面白い。見ていて安心できる。

「お前、クラスであんまり近くに来るなよ。誰にも心配されていない状況なら、小早川さんはきつと声をかけてくれる」

「わかったわかった」

そんなことよりも、どうすればユウコと仲良くなれるのだろうかというほうが問題である。

同じクラスになれたのだから、これはもう神の啓示に他ならない。ここは主体的に行動していくべきだろう。

消しゴムでも落としてみるというのはどうだろうか。席が近ければ可能だが……いやいや、なんかセコい。

「席が近かったら、消しゴム落として、取って貰うのもアリだな」
大塩の呟きを聞いて、同レベルなのかと落ち込んだ。

act 1 恋する少年 2

大塩と一緒に2-Cに入る。ユウコはまだ来ていない。

見知った顔が何人かいるが、どうにも名前が出てこない。それでも、一人だけわかる奴がいた。

「周防、お前も同じクラスか」

「……ああ」

周防慶二郎。寡黙で無愛想だが、割と情に厚く、去年同じクラスだったこともあり、仲がよい。端正な顔立ちと長身で、女子に人気があるのだと大塩が言っていた。

「また一年間、よろしくな」

「ああ」

端的すぎるセリフは決して怒っているわけでもなく、苛ついていないわけでもない。出会った当初は最初は嫌われているのかと思っていたのだが、どうやら単純に口下手で、表情をあまり変化させないだけのようだ。

とりあえず、まだ席が決まっていないので、周防の横の席に座ることにした。大塩は作戦を実行するためなのか、一人ではつんと座っている。

さて、ユウコはいつ来るのだろうかと思っていると、新たに教室に入ってくる人影が見えた。

「あ、周防君。おはよう」

「ああ」

「周防君、同じクラスなんだ。一年間よろしくね」

「ああ」

「お、ケージロー。また一緒か。ま、よろしくー」

「ああ」

三人一組で固まってやってきた女子が、周防を見つけるとすぐに、順繰りに声をかけていく。

周防は相変わらず無愛想だが、反応してくれるだけでも嬉しいの
だろう。女子達は笑顔で通り過ぎていく。まあ、こいつも一種のア
イドルみたいなものだろう。

「ブンタもまた一緒か。よろしくー」

最後に周防に声をかけていた女子が、通り抜けざまに俺にも声を
かけてきた。浅黒い肌元気の良いさそうなショートカット。澆刺^{はっさつ}と
した声は、いかにも陸上とかソフトボールとかやっていそうな雰囲気
である。だが、誰だっけ？

「……よろしくー」

とりあえず、挨拶を返してみるが、女子は俺の様子に気付いたら
しい。少々間の抜けた顔をした後、大きく溜息をついた。

「うあ、忘れてやがる。二週間前まで同じクラスに居た人間、忘れ
るかフツー？」

「すまん。人の顔を覚えるのは苦手なんだ」

もっと言えば、ユウコと大塩と周防以外はほとんど覚えていなか
ったりする。

「はあ、まあ、どうせ自己紹介を最初にするから、良いか」

そう言って女子は他の二人と一緒に少し離れた席についた。

すまん、自己紹介はきつとユウコ以外のは耳に入らない。そう思
いつつも、言うと怒られそうだったので黙っておいた。

「……赤井佳美^{あかいよしみ}だ」

気を遣ってか、周防が名前を覚えてくれる。ああ、なんか聞き覚え
があるような、無いような。

「……金池。少しは協調性を考えた方が良い」

「まさかお前に言われるとは思わなかった」

周防の場合、自分から話しかけることが少ない代わりに、話しか
けられることが多いだけだ。協調性があるとは言いがたい。

「それよりも、さつきから落ち着かないが、どうかしたのか？」

「ああ、いや、その。まあ、気にするな」

「……小早川か？」

「最近、どこかで聞いた気がするが。ええと、誰だっけ？」

「アイドルだ。同じクラスなのだろう。小早川を待っているのかと思っただが」

「名前も知らんヤツを待つ気はねーよ」

俺がさつきから待ってるのはユウコ一人だ。正直、他の女子はブサイクばかりでも全然構わない。逆に全員が美少女でも目移りしない。ユウコ一筋なのだ。

「それよりも、大塩は何故一人なのだ？」

「ああ、確かそのアイドルの……こ、こば……小林？」

「小早川」

「小早川を待つらしい。一人なら声をかけてくれるだろうって」

「成る程」

やや呆れた声で周防が溜息をつく。まあ、大塩の気持ちもわからなくはない。俺だってユウコが声をかけてくれる可能性があるなら、三日ぐらい一人で放置されている。

「……ん？」

周防がふと首をかしげて、教室の入り口を見る。何かと振り返る前に、周防の口が開いていた。

「高山か。久しいな」

高山となー！！

神速をもって振り返り、その姿を確認する。

ユウコだった。

相変わらず地味で、表情も特に明るくも暗くもない。ぼーっとした感じで、周防の声に気付いて、ややスローな所作でこちらを見ていた。やべえ、今俺は、ユウコの視界に入っている。どうしよう、顔が一気に赤くなるのが自分でもわかる。気付かれないように、下を向いておこつ。

「ん。周防……同じクラス？」

声が少し近づいた。もしかしてユウコが、こっちに来たのだろうか。動悸が激しくなる。顔もますます熱くなる。

やばい、呼吸の方法忘れた。

「同じのようだな。中学以来か」

周防と同じ中学だったのか。初めて知ったが、ナイスだ周防。これで色々とうウコのこと聞ける。お前と友達で良かったと思う。

「周防と同じ高校だと忘れてた。ま、よろしく。そっちもよろし…

…誰？」

ユウコがさばさばした声で、俺の方を指さした。

ユウコが俺を見ている。あまつさえ指をさしている。なんという僥倖。（うまいいひ）

俺は、今日という日を生涯忘れない。

「高山。人を指さしてはいけない。こいつは一年の時の同じクラスの、金池文太。こっちは高山優子」

「ふうん。よろしくカナブン」

俺に声をかけた！

しかもイキナリの渾名あだなである。今日という日を、たとえ死んでも忘れないようにしよう。

「高山。カナブンはないだろう」

「いや、カナブンでいい。よろしく……えと……」

感動に打ち震える間に話が進みそうだったので、慌てて周防の言葉を遮り、決死の覚悟でユウコと目を合わせて、言葉を紡いだ。せっかく渾名で呼ばれたのだ、このチャンスを逃してなるものか。

「ええと……」

しかし駄目だ。続く言葉がうまく出てこない。脳味噌が溶けそうだ。高山さんと呼ぶべきか。それともこちらも渾名を付けるべきか。いつそユウコと呼んでもいいのか！？

「タカさんでいい」

「ごめん、それはちよつと無理」

その渾名はいただけない。なんか色々マズイ。

しかし、まともに喋れない俺に即座に突っ込ませるとは、流石ユウコだ。やるな。

「好きに呼んで。つまらないの却下」

すげえ。ぼそぼそと喋るのに、どこことなく不思議な感じがする。すごく自然体というか、平淡な口調なのに、ユニークなのである。

「じゃ、じゃあ……ユ、ユウ」

「ん、何？」

ユウコと、呼んでいいのだろうか。いきなりこんな展開、良いのだろうか？

よし。ここは正念場だ。ユウコと、ユウコと呼ぶぞ。呼んで良いんだよな？

「……ユ、ユウ……ユウ……」

「ユウ、か。高山さんとか優子とか、ゆうちゃんとかよりマシか」
「そ、そうか……」

チキンハートのおかげではあるが、コの文字を出さなくて良かった。それにしてもいきなり愛称。しかも今、俺とユウコは会話している。くそ、こんな幸運が続くなんて、後で何かあるんじゃないだろうか。鉄筋とか頭に落ちてくるかも知れない。無論、今の俺なら指先だけで弾く自信がある。

「……高山という呼び方はつまらんのか？」

周防が自然な様子でユウコに話しかける。俺も周防みたいにさりと会話がしたい。さっきから俺は、ぼそぼそと喋るつまらない男である。

「周防は元々つまらないから、期待してない」

「……成る程」

俺が言われたら首を吊りかねない言葉だが、周防はさほど興味がないのか、軽く頷いただけだった。こいつの場合、つまらないとか面白いとか、そういう次元ではないだけの話だろう。

ユウコに惚れて、アイドル……小林だったか。その小林に惚れていない俺が言うのも何だが、世の中は顔だ。容姿だ。同じ性格で同じ境遇の美人とブスがいたら、誰だって美人を好きになるだろう。俺だって美人のユウコとブスのユウコなら、美人のユウコを取る。

つまり、顔が良いということはそれだけで有利なのだ。周防は確かに特に面白可笑しい男ではないが、なんといっても男前なのだから、面白くなくても許される。

「じゃあね」

ふと気付くと、ユウコはぼそつと呟いて、俺達のところから離れていった。くそ、折角だからもっと話しておけば良かった。せめて顔を見ておけば良かった。いや、でも、そんなことしたら俺、死んでしまうんじゃないだろうか。

「……金池、一人悶えているところ悪いのだが」

「お、おう。どうした？」

周防に話しかけられて、ようやく平静を取り戻す。同じクラスになれただけでも幸せだったのに、いきなり会話までしてしまって、あまつさえお互いを愛称で呼び合うにまで至ったのだ。悶えも呆けもする。

「高山に惚れているのか？」

「な、何を馬鹿なことを言っているのかね、君は？」

周防め、俺のポーカーフェイスを見抜こうとしている。普段、ぼんやりとしているから油断していたが、こいつはもしか、鋭い男なのではないだろうか。

「いや、何でもない。それより、見ろ。小早川が来たぞ」

「小早川？」

「アイドルだと言っている」

「ああ、小林な」

周防に促されて、仕方なく教室の出入り口に目を向ける。

成る程、アイドルという名前に負けない、美人だ。黒くて長い髪はさらさらしてるし、ぱっちりとした目は、快活かつ慈愛に満ちている。それでいて、細く引き締まった腰元なんて、健康な色香が漂いまくっている。まあ、だからといって、興味は無いが。

「おはよう、雫」

「おはよう、小早川さん」

「シズクー、おはよう」

あちこちから、声があがる。人気もアイドルに相應しいな。ユウコが入ってきたときなんか、周防が声をかけた程度だったというのに。

「おはよう、みんな。今年も一年、よろしくね」

アイドル小林はにぱつと笑って、教室を見渡した。ふむ、どの席に座ろうか思案している様子だ。

「どうだ、金池。お前もたまには、女ツ気を見せてみるというのは興味ない」

「全く。本当に恋愛に興味がないんだな。まあ、大塩のようになっても困るが」

周防がやれやれと溜息をつく。ついさっきまで、ユウコに惚れていると勘ぐっていたのに、恋愛自体に興味がないという判断をするとは、やはり周防は超のつく鈍感だ。

「あ、おはよう。金池君」

「ん？」

見ると、目の前にアイドル小林がいた。何故、俺に挨拶をしているのだ、この女は。

「……？」

「あれ、金池君？」

「ん、ああ。おはようさん」

まあ、クラスメイトになるわけだから、挨拶ぐらいは礼儀だろうと思い、軽く片手を挙げて返す。アイドル小林はにっこりと笑って、周防にも目を向けた。

「ええと、そっちは周防君だっけ。おはよう」

「おはよう」

ほら、周防にだって挨拶している。比較的、教室の扉とも近かったからだろう。手始めに挨拶をしたと言うところだ。そろそろ、寂しく待っている大塩のところにも行ってやるといい。俺なんかより、よほど歓迎するはずだ。

「金池君、席はここなんだ？」

「ああ、そうだな」

「じゃあ、隣いいかな？」

「ん、まあ構わんが」

本当ならば、ユウコが良かったのだが、まだ逆隣も空いているし、そもそも暫定的な席配置なのだから、どうせ一日二日のお隣さんだ。それに、肝心のユウコは少し離れた席で、ぼつんと座っている。俺もアイドルぐらい親しげな態度ができれば、ユウコの隣を申し込んでいるところなのに。それにしてもわざわざ、俺の隣に座るというのはどういうことだろうか。

「嬉しいな。金池君と同じクラスになれるなんて」

「そりゃ、光栄のいつたりきたり」

ああ、こんなセリフをユウコに言われてみたいものだ。何故アイドルなのだろうか。世の中は上手く行かない。

「もー。つれないなあ」

「こんなもんだ。なあ、周防」

「そうだな。むしろ、普段よりはマトモな対応だ」

「あ、そうなんだ。嫌われてるのかなって思ってた心配しちゃったよ」
アイドル小林はころころと笑って、俺の隣の席に座った。アイドルの考えはよくわからない。

「クラスメイトへの挨拶はいいのか？」

「うん、仲の良い人たちには、もう挨拶したよ」

「新しい友達ができるかもしれんぞ」

「それは追々かな」

ふむ、流石はアイドル。追々、向こうから声をかけてくるのを待てば、自動的にお友達も増えるという寸法か。ユウコとどうやってら会話ができるのだろうと、真剣に悩んでいる俺とは大違いだ。

「それより、金池君は春休みとか、何してたの？」

アイドルはにこにこ笑って、世間話を始めた。まあ、新しいクラスメイトと交流を持つのも、悪い事じゃない。ユウコももっと話

したいと思うが、舞い上がりすぎて口々に喋ることができないし、ちょっとクールダウンしておいたほうがいい。

「まあ、勉強したり、バイトしたり、家事手伝ったり、犬の散歩したり」

「わあ、すごいね。偉いなあ」

「別に。ただ暇だったただだから」

「ううん、凄いよー。私なんて、課題とか、昨日終わらせたただけだし」

「やることがなかったただけだって」

どうにも、アイドルは俺を偉い人にしたいらしいが、実際にユウコに会えない時間を如何に費やすか悩んだ挙げ句の、苦肉の策だったので、ちつとも偉くはない。

ユウコと同じクラスになるとわかっていたなら、色々と対策を練っておけば良かったと、後悔しているほどだ。

「あ、でも、私もアルバイトしてたんだよ。ファミレスで」

「へえ。人気あっただろう」

「あはは、そんなことないよ。高校生だからって、ちょっと甘やかされたぐらい」

「俺もファミレスだったが、ちつとも甘やかされなかったぞ」

「それは、金池君ならもつと伸びるって期待されてたからだよー」

アイドルは天真爛漫な笑みを浮かべて、なおも俺を褒める。

俺のことを謙虚とか言っているクセに、アイドルはアイドルで、謙虚な上に他人を褒めるのも上手い。俺よりよほど出来た人間だ。

「……そういえば」

ふいに、ぼそり、と周防が呟いた。

「二人は知り合いだったか？」

そういえば、あんまり自然に話しかけてきたものだから、忘れていた。アイドルと俺は確か、今まで話をしたこともなかったはずだ。去年も違うクラスだったし、アイドルが俺のことを知っているとは思えない。

「そつだよ。ね、金池君」

「あれ、そうなのか？」

いきなり同意を求められて、首をかしげてしまった。はて、廊下ですれ違うぐらいのことはあったと思うが、会話をした記憶など、これっぽっちもないのだが。

「ううー、ひどいよ。忘れちゃってるー」

アイドルは眉をひそめて、ちよつと悲しそうにしながら、唇を尖らせた。

「すまん。全く身に覚えがない」

「もう。小学校から一緒じゃない。確かにあんまり、お話とかしたこと無かったけど」

「すまん。俺は人の顔と名前を覚えるのが苦手なんだ」

「中学校でも同じクラスだったよ？」

「中学校で覚えてるのは、一人ぐらいだな」

基本的に友達は少ない。小学校、中学校の間で顔と名前が一致するのは、せいぜい二、三人だろう。

周防と大塩。友達が二人もいることに、俺が驚いているぐらいだ。

「……まあ、金池だからな。毎日一緒にいる俺の顔を覚えるのに、一週間かかった」

「名前を覚えたのは、つい最近だな」

そう言つて、俺と周防は呵々と笑う。アイドルはそんな俺達の様子を眺めて、くすくすと笑っていた。

「じゃあ、ちゃんと私のことも覚えてね。小学校以来の友達に覚えられていないなんて、ちよつと悲しいしねー」

「おう。善処する」

流石に、これだけキラキラした美人ともなると、俺だつて覚えることが出来るだろう。

ちなみに、俺に最速で名前を覚えさせたのは、大塩だったりする。会ったその日に携帯電話の番号を交換させられて、三日三晩メールを寄越してきて、無理矢理覚えさせられた。

「ああ、携帯のアドレス教える。メールとかで名前表示されたら、覚えやすい」

「あ、そうだね。うん、いつでもメールしてね。私からもメールするよー」

「なるべくウイットに富んだユニークなメールを頼む」

大塩のように、やれあの子が美人だとか、彼女が欲しいとか言う、ただの愚痴のようなメールが来ても困るだけだ。

アイドルと電話番号、メールアドレスを交換する。

そういえば、名前なんだっけ。ええと、小林だっけか。

こばやし、と。登録完了。覚えようと思えば、これだけでも覚えられるもんだな。

act 1 恋する少年 3

そうこうしている間に、チャイムが鳴り、担任という若い教師に引率されて、始業式に向かった。

「お前、なんでだよ。なんで、小早川さんと……くそ、俺、一人でずっと待ってたのに」

始業式で隣に並んでいた大塩が、殺気を孕みながら俺を見ていたが、小早川などという人間は知らないし、きつとアイドルに無碍にされた大塩が、脳内で作り上げた妄想なのだろうと納得しておいた。校長の長い割に楽しい話を聞きつつ、始業式は終了。老齡かつ厳格な人柄で知られる校長ではあるが、話は面白いのだ。嘘か本当かは知らないが、若い頃に色々と無茶をやってきたらしく、その武勇伝を語るのだが、ある程度タメになるので、教師も止めず、聞き手としても飽きない。

「……校長も、苦労しているのだろうな」

大塩の逆隣に立っていた周防は、どこか大人びた様子で呟いていた。こいつはやはり鈍感なのか、鋭いのかわからない。

かくして、教室に戻り、ホームルームと相成った。

「担任の仁科恵にしなけい一だ。新任で不慣れなこともあるが、精一杯やる。困ったことがあれば何でも相談してきてくれ」

始業式前にも顔を見せていた仁科教諭は、新任という言葉が納得できる、若くて澁刺とした好青年という風貌だった。中々の男前で、女性陣からほうつと吐息が漏れる。

ちなみに、ユウコはぼけーとしていただけだった。一安心。

「そうだな。それじゃ早速、自己紹介から行こうか」

担任教師（名前を失念）はそう言つと、教室の一番前。それも窓際に座っていた女子を指名して、自己紹介を勧めた。

「いきなりアタシか……まあいいや。赤井佳美。陸上部所属です。よろしくー」

見覚えのある顔が挨拶していた。確か、今朝声をかけてきた子だ。去年も同じクラスと言っていたか。陸上部かソフトボール部と思っていたが、陸上部の方だったらしい。

「赤井。もうちょっと、こう、趣味とか言おうぜ」

担任はちよつと脱力した感じで、赤井とやらの声をかける。赤井は、やれやれと頭を掻いて、こほんと咳払いした。

「趣味は運動。ええと、うーん。まあ、自己紹介って苦手なんで、追々わかるでしょ。興味あるヤツは後で絡みに来い。以上！」

中々男らしい自己紹介だった。無骨とも言える。周囲に倣って、俺もその男気に賞賛の拍手を送る。

その後、何人が続いて、特に面白くもない自己紹介をした。そして、早くもユウコの登場である。窓際の席だったので、早くに順番が回ってきたのだ。

「高山優子。料理部所属。趣味は、まあ強いて言えば創作料理。よろしく」

古武士のような、簡潔かつ必要最低限のことしか言わないユウコを、うつとりと眺める。周囲のやや申し訳程度の拍手に混じり、しかし恥ずかしいので控えめに拍手する。控えめだけど、万感の想いは込めておいた。

そして、再び知らない連中が続いた後に、俺の隣の、アイドルの番になった。周囲が不意に固唾を呑むのが、気配でわかった。流石に、アイドルとまで呼ばれると、レベルが違うのだな。

「ええと、小早川雫です。部活には入ってません。趣味は、ええと……料理とか、音楽鑑賞とかです。これから一年、よろしく願います。あ、よかったら雫って呼んでくださいね」

アイドル……小林ではなく、小早川だったのか。紛らわしい。

まあ、下の名前で呼べと言っていたし、それでいいだろう。こっそりと携帯電話を取り出して、名前を変更しておく。面倒臭いので、小林シズクとしておいた。

遅ればせながら、他より妙に大きい音の拍手に混じり、手を叩く。

大塩が思い切り大きな拍手をかましていた。アイドルが最後にちらつとこつちを見て、微笑んでいたのは気のせいだろうか。

そして、幾人かの後に、俺。

自己紹介は苦手だ。あの一番手の女子みたいに、どうにも上手く喋れない。

「えーと、金池文太。帰宅部で、趣味は無し。他人の顔と名前を覚えるのが下手なんで、よく間違える。さっきもそれで怒られた。なるべく頑張るから、みんなも頑張れ」

我ながら微妙な自己紹介に、拍手はまばら。つつい、テンパってしまつて、余計なことを言ってしまったかもしれない。ユウコは何が面白かったのか、ニヤニヤしていた。ひゃっほう。ユウコを笑わせたのなら、それで良ししよう。

そして、俺の次に、真後ろに座っていた周防が立った。

「周防慶二郎。同じく帰宅部所属。趣味は読書。金池は本当に名前を覚えるのが苦手だが、悪気があるわけじゃない。イヤッだし、会ったびに名前を教えれば一週間で覚える。よろしく頼む」

周防の野郎、誰が俺の紹介をしろと言った。担任もあきれ顔である。しかし、女性陣からは「周防君、優しいね」とか「友達思いだね」という賞賛の声が漏れる。こいつの場合、普通に友達思いの優しい奴なので、対処に困る。

またしばらく自己紹介が続いて、ついに最後の一人。知り合いの中では一番、危険と思われる大塩の番になった。こいつは、基本的に馬鹿なので、何をするのか判らない。

「大塩信つす。帰宅部所属つす。金池は三日三晩メールし続けると名前を覚えるので、ガンガンメールしたらいいつす。よろしく!」

「お前といい、周防といい、金池の紹介してどうするんだ」担任の的確なツツコミに、教室から笑いが起きる。くそ、心配して損した。

こいつ、笑わせるために俺をネタに使いやがったな。

「……さて、これで一回りしたな。まあ、今日はこれぐらいだ。一

日で全員覚えるのも無理な話だが、一年間、同じクラスで過ごす仲間だ。みんな、仲良くやろう。それと、金池、後でメアドを交換しような。先生も名前を覚えてもらわないと困る」

おう、担任まで俺で笑いを取りに来やがった。くそ、俺が笑われるわけじゃないんだろが、けっこう恥ずかしいな。

「まあ、これで友達も増える。大塩なりの優しさかもしれないぞ」

周防がぼそりと呟く。ううむ、どうにもタダのウケ狙いにしか思えないのだが、そう思っておいた方が気が楽か。

ホームルームが終わり、担任とメアドと携帯番号を交換してから、晴れて自由の身となった。本当にやるとは思わなかったぜ、仁科教諭。

「ブンター、これ私のアドレスな。登録しとけ。んで、メールで電話番号送つとけよ」

ついでに、赤井佳美（周防にもう一度教えてもらった）の連絡先も組み込まれた。去年のクラスメイトだっただけあり、名前を覚えられていないことにショックを受けていたようだからな。

「よかったな、金池」

周防が珍しく微笑みながら言う。別に嬉しくはないのだが、まあ、友達が増えるのはいいいことかもしれない。よもや、担任のメアドをゲットすることになるとは思わなかったのだが。

「さて、これからどうする？」

いつの間にやら、大塩も話の中に入っていた。近くにいたアイドルも、何故か俺達の傍から離れようとしなない。

「時間もあるし、ちよつとどこか寄ってはいかがかー」

アイドルがにぱつと笑って、俺達を見る。その瞬間、大塩がものすごい笑顔で、壊れた猿の人形みたいに、首を上下に振った。

「金池君と周防君も行くよね？」

「……たまには、悪くないな。金池も折角だし、来るか？」

「まあ、小金もあるしな」

とりあえず、大塩とアイドルが二人きりとなると、大塩が何をするかわからない。一人のクラスメイトとして、大塩の暴走を止める役回りもしなければならぬだろう。

「よっしゃ、どうせならみんなで行こう。この後暇な奴ら、一緒にどっか行こうぜー！」

早速、大塩はまだクラスに残っている暇な人間に声をかけ始めた。お祭り騒ぎが好きな奴なので、みんなで動くと思えば、有象無象だろうが引張ってくるのだ。

しかも今回は、大塩にとって運が良い。なんせ、アイドルと周防という二本柱がメンバーにいるのだ。男女共に、興味は高いと見た。

「あ、私も行くー」

「お、俺も行くっ！」

あつという間に、五人ぐらいが加わる。やるなアイドルと周防。そして、俺としてはここからが肝心だ。ユウコはまだ教室にいる。あわよくば、放課後に一緒に遊ぶということができるかもしれないのだ。

「高山もどうだ。お前は協調性がないから、良い機会だと思うのだが」

しかも旧知の周防が、ユウコに声をかけてくれている。周防はマジでイイヤツだ。俺が女に生まれていれば、抱かれても良いと思っただろう。まあ、女に生まれてもユウコに惚れていたかもしれないが。

「ふむ。料理部も活動がないし、構わないが」

「では、参加しておけ」

周防にしては、割と強引な行動で、ユウコ参戦。脳内の俺がひやつほうと声をあげて、ところ狭しと駆け回る。

「ようし、じゃあゲーセンでも行くかー！」

大塩の言葉に、一同頷く。

本来、ゲームセンターとはデートなどの類では忌避すべき場所である。ゲーム好きの男子は自分のゲームに夢中になってしまふ可能

性があったり、女性陣は不慣れな場所に戸惑ってしまうからだ。

しかしながら、我がクラスメイト。否、我が校の人間はそんなこと、誰も気にしない。

なぜならば、我が校から徒歩で行ける範囲にある遊び場が、ゲームセンターしかないという、悲しい事実があるからだ。

ゲームセンターでの親睦会は、概ね楽しかったと言うことが出来るだろう。

俺の隣には基本的に周防とアイドル、大塩がいて、ユウコは別のクラスメイトと一緒に動いていたが、ユウコの姿を眺めることが出来ただけでも、十分に幸せなのである。

そして、翌日。俺は相変わらず、一人で登校している。友達が少ないということもあるが、周防は自宅が高校の近くなので、徒歩通学。大塩は俺より一本遅い電車に乗るので、会うことがない。

「ふあぁっ……」

てくてくと駅に向かって歩いてみると、定期的に欠伸が出る。畜生、アイドルのやつめ。大塩の言葉を真に受けたのか、本当に一晩中メールを寄越しやがって。

まあ、夜の二時を過ぎたあたりで、俺が限界を迎えて寝たからいいものを、本当にウィットに富んだ、ユニークなメールを送ってきたのだ。あそこで寝ていなかったら、確実に徹夜していただろう。

「おはよう！」

そんなことを考えながら歩いていると、後ろから声がかかった。振り返ると、件のアイドルが立っている。確か、小学校が一緒とか言っていたので、家も割と近くなのだろう。

「おう、おはようーさん」

「どう。名前覚えてたかな？」

開口一番にそれか。眩しい朝日の下、それを凌駕するようなきらきらした笑顔を浮かべるアイドルは、とても寝不足には思えない。

「ええと……ああ、覚えてる。小林だろ」

「もう、小早川だってばー」

そつえば、確かそんなことも言っていた。直すのが面倒だから、小林のままで覚えてしまったのだ。

「まあ、名字ってあんまり好きじゃないんだけどね。そうだ、折角だから、下の名前はちゃんと覚えてよ」

自分の名前を間違われたのに、アイドルは笑顔を崩さない。彼女ならば、芸能界で通用するかもしれないな。顔も美人だし、ありえない話ではないだろう。演技さえ出来れば、女優すら目指せそうだな。ええと、ちよつと待てよ。ああ、なんか水っぽい名前だったような」

「水っぽいって、なんか嫌だよ。当たってるけど」

アイドルはむー、と眉を寄せて、可愛らしく怒ってみせた。ポーズだとしても、違和感も嫌味な感じもない。そりゃモテるだろうな。しかし、水っぽい名前ってところまでしか覚えてないからな。その辺りから、適当に考えていくか。

「うーむ。ええと、ナギサ」

「それじゃ塩水だよー」

「ウシオ」

「それも塩水……」

「シブキ」

「あ、ちよつと近くなつたかもー」

「アケミ」

「水違いだよー。なんか、お水っぽいよー」

成る程、割と頭の回転は速いらしい。俺の素晴らしいネタにもついてくるとは、中々やりおる。

「ええと、そうだ、そうだ。思い出した。ツユだろ」

「自信満々に言って間違ってるってばー」

そろそろ、悲しくなってきたのか、アイドルは携帯電話を取り出して、何やらピコピコと文字を打ち始めた。

すると、不意に俺の携帯電話が鳴る。見ると、小林シズクからメールが来ていた。

「ああ、小林シズクな」

「小早川シズクなんだけどなあ……」

アイドルはなんだか不満そうだった。

結局、クラスメイトと出会った手前、一緒に登校することになってしまった。駅で一緒に電車を待ち、狭い車内で微妙に身体を密着させてつ。

昨晚中、ずっとメール交換をしていたわけだし、やぶさかではないが、こんなところをユウコに見られたら、誤解を生んでしまう恐れがある。

まあ、相手はアイドルなので、むしろ男子からの突き刺さるような殺意の視線の方が怖いわけだが。

結局ユウコと遭遇することはなく、満員電車を抜け出して、陽桜駅に降り立つ。ここから、我らが陽桜高校までは、徒歩五分と言うところだ。

「おはよう」

駅前を通り過ぎてすぐに、周防と出会った。実に良いタイミングに、俺は笑顔で周防を迎える。教室までアイドルと二人で行くなんて、周囲の目が怖くてできやしなかったのだ。

「よお、一緒に行こうぜ！」

「おはよう、周防君！」

「ほう、小早川も一緒か。珍しいな」

「私と金池君、同じ小学校出身だもん。乗る駅も一緒だからね」

「成程。金池はこれで中々気の好い男だ。これからも仲良くしてやってくれ」

周防はまるで俺の保護者のように、アイドルにぺこりと頭を下げた。アイドルはそれを冗談と受け取ったのか、笑顔で「もう、とっても仲良しだよ」と、冗談で返した。

教室に入ると、既にユウコの姿があった。他にも、半分くらい席が埋まっている。

「おはよう、高山」

律儀な周防が、旧知の間柄であるユウコに声をかける。ぼんやりと本を読んでいたユウコは、ちらりとこちらを見て、うむと大仰に頷いた。

「おはよう、周防の。それに、カナブンとシズクだったか」

やはり改めて聞いても、ユウコの声は素晴らしい。しかも、きちんと愛称で呼んでくれている。これに勝る感動があるだろうか。

「おはよう、ユウコちゃん」

アイドルも挨拶したので、続いて俺も挨拶をしようとする。しかし、折角愛称を呼ばれたのだから、こちらも愛称で応えねばなるまい。

「えっと……お、おはよう。ゆ、ゆ、ユウ……」

たったこれだけのことで、顔から火が出そうになる。

まったく、ポーカーフェイスで通っている俺を、ここまで狂わせるなんて、なんという罪な女なのだ。

「カナブンは名前を覚えてないと聞いたけど、覚えているじゃない」

ユウコは少し驚いたように顔を上げて、俺を真っ直ぐと見た。

ぬう、傍にいただけで動機に眩暈、神経衰弱さえ引き起こしかねないというのに、まだまだ追い打ちをかけようというのか。流石は俺が惚れた女だけのことはある。

「ねえねえ、カナブンって金池君のこと？」

俺が固まっていると、アイドルがユウコに話しかけた。ふう、なんとか話が逸れたようである。助かったぞアイドル。

「金池文太。だから、カナブン」

「うーん、カナブンかあ。なんとなく、わからなくも無いような……」

「雰囲気もカナブンみたいだし、気に入っている」

お、俺の渾名をユウコが気に入ってくれている！

しかし、雰囲気もカナブンみたいというのは、一体、褒められているのかどうか、かなり怪しいラインだ。

カナブンって、あの、カブトムシの角を無くして、二回りぐらい

小さくしたヤツだ。

なんか、弱々しいというか、庶民的というか。

「あ、でも、カナブンって可愛いよね。それに、なんか優しそうじゃない？」

俺がさりげなく落ち込んでいることに気付いたのか、アイドルが必死のフオローを入れてくれる。しかし、カナブンの庶民的なイメージが強すぎて、俺も周防も、ユウコも微妙な顔だ。

しばし微妙な空気が流れたが、それを打ち消したのが大塩であった。

「おつはよー。お、皆さんお揃いで。昨日は楽しかったよな！」

教室に入ってくるなり、騒々しい声で俺達に近づいてくる。名目は俺と周防がいるからだろうが、目的は間違いなくアイドルだろう。こついうときに大塩の無神経な明るさには救われる。

担任（また名前を忘れた）が入ってきたところで、大塩の馬鹿話が終わりを告げ、それはつまり、俺とユウコの会話が終わったことも意味していた。

「あー、そついや席替えしてなかったけど、まあ、いいだろ。とりあえず一ヶ月ぐらいそのままにしてみる。不満があるなら聞くが」
いい加減な担任の台詞に、俺は不満たらたらであったが、まさかユウコの隣じゃないから席替えをしろとも言えない。隣でアイドルが嬉しそうに俺を見ていたことは覚えている。

「良かったな、金池」

周防が後ろから声をかけてきた。何が良いものか。

授業は基本的に春休みにしっかりと復習をしたおかげで、問題なく頭に入ってくる。人の名前を覚えるのは苦手だが、それはあくまでも面倒臭いからであり、別に記憶力に難があるわけではない。

まあ、勿論単純な暗記自体も面倒だとは思うが、学生の本分は勉強なので、ちまちまとノートを取り、たまにぼーっとユウコを眺める。学生の本分は勉強だが、俺の本分はユウコだ。

それにしても眠い。全部アイドルの所為だ。ウィットに富んだユーマなメールを送ったアイドルが悪い。第一報の題名が「好きです」と来たのだから、これはもう素晴らしい。大塩なら確実に舞い上がって勘違いをしていただろう。本文には俺を褒めちぎる文句が連ねられていた。

『小学校の頃に、ガキ大将にいじめられていた私を、金池君が助けてくれたのを、今でも覚えてる。全然お話をする機会がなかったけど、高校まで一緒になって本当に嬉しくて。二年生になって、クラスも一緒に。久しぶりにきちんと見た金池君はすごくカッコよかったよ』

白眉である。面白いメールを送れと言って、告白まがいのメールを送りつけてくる感性が素晴らしいかった。きっとアイドルとは友達になれると思った瞬間だった。

ちなみに、小学生の頃にガキ大将をぶん殴った記憶はあったが、誰かを助けたつもりではなかった。廊下を歩いていたときに、ライダーキックと連呼しながら、何かを蹴り飛ばしていたガキ大将の、その蹴る動作が、ちっともライダーキックでないことに怒りが爆発したただけだ。ライダーキックはこうするんだ馬鹿野郎と啖呵を切り、実際に喰らわせただけである。

まさかあのとき、蹴り飛ばされていたのがアイドルだったならば、助けたことになるのかもしれないが、俺に助けたつもりはない。し

たがって、俺はこう返した。

『俺は正義の味方だからな。大切なものを守るために倒したただけだ』
勿論、大切なものとはライダーキックのことである。面白いメールには面白いメールで返す。これが俺の礼儀だ。正義の味方という陳腐な言葉を、実に堂々と書き連ねたこのメールに、俺は自画自賛の拍手を送ったほどだ。

『やっぱり覚えていてくれたんだ。大切だなんて、すごく嬉しいよ』
アイドルは恐ろしい女だと思った瞬間だった。なんと、ライダーキックの素晴らしさを分かち合える存在だったのだ。これはやや直球で、ユーモアとは少し違うが、俺の好みを把握しなければ、ライダーキックの素晴らしさを共有しようとは思わない。

『今でも大切だからな』

敢えて俺はこの一言をチョイスした。直球には直球で返す。これはアイドルへの挑戦でもあった。メールの流れをぶった切る、この返答に困るメールを、どうユーモラスに切り返してくるのか。

『（／／／／／）』

これには参った。暗号である。この記号の羅列を解読するのは非常に難しい。俺はこれでも推理小説マニアである。俄然火がつき、深夜まで解読に挑んだのである。答えは未だに出ていない。

ユウコを眺め、授業を聞き、合間合間にアイドルの課した暗号の解読を試みているうちに、一日が終了した。

「一緒に帰ろ、金池君」

「金池、帰ろうぜー！」

「駅前の本屋に行く。途中まで一緒に行こうか」

帰りの用意を済ませて立ち上がると、アイドルと大塩と周防が同時に俺に声をかけてきた。ユウコは残念ながら部活なのか、すたすと教室を出て行ってしまっている。

「まあ、小林と大塩は一緒の方向だし、周防が一緒なものも全然いいから、かまわんが」

「こ・ば・や・か・わ」

すまん、アイドル。今のはわざとだ。

「まあまあ。小早川さんの名前を呼ぶのが恥ずかしいんだって。金池ってウブだからな」

大塩が見当違いのフオローをしてくれる。金を払いたくなるような見事な間違いだが、アイドルが笑顔になったので効いたのだろう。良しとする。

帰り道は、ずっと大塩が喋るという様子だった。

基本的に大塩という男は、口が上手い。次から次へと話題を提供して、他人の笑顔を見るのが好きなのだという。漫才師という職業を勧めたが、本人の持論で、決してそれを本職にはしたくないのだという。あくまでも、日常の楽しみの一つとして、周囲に笑顔を咲かせたい。なんとも御立派な意見である。

勿論、俺は大塩のトークをさほど楽しんだりはいしない。感性の違いなのかもしれないが、聞いていて飽きないものの、笑ったことは一度もない。そんな俺達が何故、一緒にいるかというところ、大塩が「いつかお前を笑わせてやる」と、四六時中喋りかけてくるようになったからだ。毎日聞かされるから、大塩のトークに慣れてしまい、ますます笑いから遠ざかっているが、それを大塩は気付いていない。もっとも、それだけ聞いていながら大塩の口から他人の悪口を聞いたことがないのは、誇って良いことだと思う。だからこそ、曲がりなりにも友達と言える関係を結んでいるのだから。

などと考えているうちに、気付けば駅前まで到着していた。大塩のことを考えていたから、大塩のトークを全然聴いていなかった。当然俺はくすりと笑っていない。大塩はチャレンジ精神の強い瞳をギンと光らせて、明日こそはと呟いた。

その後、俺達は周防に付き合い、本屋に入った。さっきまでの大塩のトークを称えるべく、アイドルと大塩を二人きりにさせてやるうというアイコンタクトを周防に送る。周防は口数こそ少ないが、アイコンタクトでは雄弁になる。どうやら専門書のコーナーで目的

の本を探した後、コミックスを立ち読みするらしい。俺は推理小説のコーナーで時間を潰すことにした。

大塩は俺達のアイコンタクトを理解できるので、感涙しながらアイドルの隣に並び、あれこれと話しかけていた。無神経な明るさではあるが、空気を全く読まない馬鹿ではないので、本屋という雰囲気の中、周囲に迷惑をかけないトーンを意識がけているところに好感が持てる。だが、ここで俺が失敗した。

「ちよつと推理小説のほう、見てくる」

大塩への援護射撃のつもりだったのだ。しかし、この言葉にアイドルが反応した。

「あ、私もー」

迂闊であった。アイドルは俺に、あの奇妙な暗号を送ってきた。つまりはミステリ好きであったのだ。俺は大塩に心の中で謝りながらも、宣言した以上、実行に移さねばならなかった。しかし、ここからが大塩の力の見せ所だ。

「よし、じゃあ二階だな」

どうだろうか。この見事な台詞。まるで最初から自分がそこに行くのが決まっていたかのような流れである。是非、ユウコと喋る機会に活用させてもらいたい。

「あ、でも大塩君がさっき好きって言ってたマンガ、今日が発売日だよ。一階に置いてあったよ？」

アイドルの反撃に、大塩はおそらく、先ほどのトークを呪ったに違いない。少し崩れそうな笑顔で「そうだった。じゃあそっちに行ってくる」と言い、去っていった。アイドルの優しさが裏目に出たか。

「大塩君って、面白いね」

アイドルは笑顔で大塩を見送り、嬉しそうに呟いた。ここは俺が大塩のフォローをすべきだろう。さきほどの失敗を含め、本来ならば俺を笑わせるためにトークをしていた大塩への、せめてもの償いだ。

「ああ。あいつは最高に面白い。あいつがいなけりゃ、こんな楽しい日常を送れなかっただろうしな」

別に最高というほど面白くもなく、楽しいのはユウコがいるからなのだが、その辺りは多少、色を付けておいてやった。これで大塩の評価は鰻登りに違いない。

「ふふ、金池君って友達思いなんだね」

何故か俺の評価が上がった。この女、どういう仕組みで動いているのだ。せめてその台詞をユウコの前でリピートしてくれないだろうか。そうすれば俺は感謝して花束の一つでも贈呈する。

「いや、俺は違うから」

「ううん。友達を素直に褒められるって、すごいよ。照れなくて良いのに」

「いや、本当に違うんだ」

「ふふ、仕方ないなあ。そういうことにしておいてあげる」

何度言ってもアイドルは聞かなかった。まさか、大塩を褒めすぎたのが悪かったのだろうか。人間関係は得てして難しい。これだから周防と大塩以外の人間とはあまり付き合いたくなかったのだ。無論、ユウコは特別である。まあ、今となってはアイドルもライダーキックの同志であるから、やぶさかではないのだが、もう少ししっかりと人間性を把握しなければ、上手く付き合う自信がない。

かくして、俺と周防の計略は失敗に終わり、それでも大塩は好きなマンガを買えてそれなりに満足そうだった。

「それじゃあ、また明日なーっ！」

周防と別れ、途中で大塩とも別れ。アイドルとは駅が一緒なのでしばらく一緒だったが、駅から数分も歩けば、すぐに別れ道に差し掛かった。

「今日もメール送って良いかな？」

「断らなくてもメールは届く。返すかどうかはしらんが」

まだ解読が済んでいないので、さらなる難題を送られるとなると、流石の俺も少々手に負えない。推理マニア仲間でもあるアイドルは、

それが不満なのか、むーっと眉をひそめたが、すぐに爽やかに微笑んで、じゃあ送ってみようかなと言った。

新学年が始まって数日。やはり俺は眠い。

理由は言わずもがな、アイドルのメールである。あれから毎日のようにアイドルはメールを送ってくる。今回は少々趣向を変えてきたらしく、抱腹絶倒モノの、ギャグのオンパレードであった。

「おはよう」

「おはようさん」

そんなアイドルは、人気者の癖に寂しがり屋なのか、先日別れた場所で俺を待つており、挨拶をして通り過ぎようとしたところをしっかりと捕まった。

「なんで通り過ぎるのよー？」

「まさか俺を待つてるとは思わなかったからな」

並んで歩き出すアイドルに、俺は再び戦慄を覚える。理由は二つあって、ひとつは周囲の目。二つめは昨日のメールのとき、ギャグを言われたら今まで通してきたクールで緋背な俺のキャラクターが台無しになるからだ。

「今日は金曜だから、明日はお休みだね」

アイドルが世間話を持ちかけてくる。これはあくまでも前フリと見た。絶対に笑ってはならない。さてはアイドル、この俺に勝負を仕掛ける気だな。ならば俺も負けはしない。どこまでいっても俺はクールかつナイスガイで通してやる。

「せっかくのお休みなんだし、どこかに出かけたいねー」

「ああ、そうだな」

思わずユウコと二人で遊園地にでかける様子を思い描き、俺は一人で悶えた。

決めているのだ。最初のデートは遊園地。人混みの中を手を繋いで歩き、ジェットコースターに乗って、お化け屋敷に入って。休憩のときはソフトクリームをベンチで食べる。締めは夕焼けの中、観

覧車に乗るのだ。西日を受け、幻想的な雰囲気にも包まれるユウコは、間違いなくこの世に顕現した女神だろう。

「遊園地とか、いいよねー」

「うむ。実に良い」

流石、アイドルは俺を解っている。ユウコは物怖じしないから、お化け屋敷でも驚かないだろうけど、薄暗い中を二人で歩くだけでいいのだ。平気な顔をしたユウコを褒めれば、それはそれで、好感度は上がってくれるだろう。

「明日行ってみようか？」

「大塩も周防も割とそういうの嫌いじゃないし、いいかもな。折角だし、他にも誰か誘うか……」

できればユウコを誘いたい。いやしかし、初デートで遊園地に行く決めているのだから、このタイミングで行ってしまつては、初デートのときの新鮮味に欠けるのではなからうか。むう、これは中々の難問である。

「……やっぱりお金ないしいや」

俺が必死に思案していると、急にアイドルが肩を落として先ほどの発言を取り消した。

折角人が真剣に悩んでいるというのに、いきなり中止とは、女心と秋の空とはよく言つたものである。

「やっぱりもう少し解りやすく言わないと、わからないかなあ……」
アイドルがぼそぼそと独り言を呟いていたが、独り言とは得てして他人に聞かれないものである。紳士を自称する俺は、一度は耳に入つたその言葉を、あつという間に忘れた。忘れるのは何より得意だ。

さて、学校では相変わらず大塩と周防の三人を基本として、隣の席のアイドルや、周防と仲の良い陸上女などと世間話をすることが多い。

「ブンタ。いい加減アタシの名前も覚えろよな」

陸上女は口ではそう言いながらも、別に怒っている様子はない。

根っからサバサバした女なのだろう。こういう裏表のない人間は嫌いじゃない。頑張つて名前を思い出そうとするが、既に陸上女という渾名が俺の中で浸透してしまっているのか、さっぱり思い出せない。褐色の日焼けした肌が印象的で、確かそれに近い名前だったよ。うな気もするのだが。

「ええと。ゆっぴがあがよしこ夕陽丘良子だっけか」

「ヨシ、しか合つてねーよ。あかいよしみ赤井佳美だ。どいう間違え方だよ、まったく」

「日焼けしてるから」

「日焼け具合で名字が変わる人間なんていねーよ」

至極真つ当な意見に、俺は思わず深く頷いた。確かにその通りだ。陸上女は見たところ、勉強が得意ではないようだが、頭は悪くない。間違えたことに呆れても、怒りはしない懐の深さもある。ユウコがいなければ、魅力的に見えたかもしれない。

「……ケージローよう。なんでコイツは憎めないんだろうなあ？」

「人の名前を覚えるのが苦手な分、そういう魅力を持って生まれてきたのだろうな」

勝手に俺の魅力について周防が語る。こういうストレートな褒め方を誰彼構わずしてしまうから、周防はクールで気取っているように思われがちなのに、男女共に人気があるのだ。

順調にクラスメイトと打ち解けていた俺だが、その日の放課後、とんでもないことに気付いてしまったのだ。

俺は、ユウコとほとんど何も話していない。始業式以来、ほとんど何も、である。

ユウコと同じ空気を吸えるだけで、確かに目が眩むほど幸せではあるのだが、やはり俺も人間である。同じ空気を吸える間柄なのだから、次は話ができる関係にまで上り詰めたい。

しかし、冷静に考えると、今の俺は会話どころか、目を合わすだ

けで赤面して、呂律が回らない。このままの俺で次のステップに挑んだところで、何もできずに落胆するのがオチだろう。

ならばどうするか。答えは簡単だ。俺が、強くなればいい。

確かに俺はポーカーフフェイスで通っているし、そこの男子諸君ではできない、アイドルとの冷静な会話だって軽くこなすことだってできる。しかし、俺には心の強さが足りなかったのだ。ユウコを前にしてでも、真っ直ぐとその瞳を見つめることのできる強さ。……周防、大塩。俺は修行をしてくる。ナニ、月曜にはきちんと学校に来るさ。それまでに一皮むけてくるぜ」

「よくわからないが、前に進むのだな。頑張れ。応援しているぞ」

「ほんと、よくわかんねえけど、ちょっと格好いいな。頑張れよ」

とりあえず近くにいた二人に意思表示をして、早速修行のために動き始める。やはり修行と言ったら山籠もりだろう。ユウコと真正面から話すためだ。熊ぐらい一撃で倒せる程度の強さが必要だ。

「じゃあ行ってくる」

俺はシュタつと手を挙げ、鞆を引っ掴んで教室を後にした。しばしの間だが、さらばだユウコ。お前のために、俺は強くなって戻ってくる。熊ぐらい、指先一つで倒せるほどに。

「おい、まだホームルームが残っているぞ……と、既にいないか」
「ったく。金池は何か決めたら、ほんと周りを見ないよな」

友人達の声は、既に俺の耳には入っていないかった。

かくして、俺は二日間の山籠もりで、ユウコと相対するための精神力を手に入れなければならなくなった。熊を眼光だけで倒すのが指標ではあったが、よくよく考えてみると、熊を倒したところで、ユウコと楽しく会話をできることにはならない。

「……仕方ない」

俺は早々に山籠もりを諦めて、より良い方法を探すことにした。熊を倒すのは楽しそうだが、この辺りの山に熊はいない。わざわざ熊のいるところまで出かけるのも面倒臭いので、ポチと庭先でたわむれるだけで満足した。

しかし、熊を倒さないでユウコと向き合う強さを手に入れるとなると、はたしてどうすればいいのだろうか。決して女性全般に苦手意識を持っているわけではない。つまり、好きな人間と相対したときにだけ、俺は異様なほど緊張してしまうのだ。

「つまり、ユウコと向き合うことに慣れればいいわけだな」

結論は出た。残念な結論だったと言わざるを得ないが。

ユウコと向き合うために強くなりたいのに、ユウコと向き合わねば強くなれない。ユウコと向き合うためには、俺が強くなければいけなくて、そのためにはユウコと向き合う必要があるわけだ。

完全に取っかかりを失った。ニワトリが先かタマゴが先かという論争をする生物学者の話と同じだ。どちらかを先に持っていこうとすると、もう片方と矛盾する。

完全にお手上げ状態で、俺は自室のベッドに腰を降ろした。

ユウコ笑顔が脳裏に蘇る。それだけで俺の心臓は物凄い勢いでポンプ運動を繰り返し、頭がぼんやりとしてくるほどだ。胸だけとわず、身体中が熱くなる。こんなに好きなのに。せっかく同じクラスになれたのに。どうして俺は何もできないのだろう。せめて、もう少し恋愛に免疫があるならば、こんな苦しい思いなどせずに済

んだかもしれないのに。

「……それだッ！」

突如として、俺の灰色の脳細胞が進化の兆しを見せた。恋愛経験がないのであるならば、恋愛経験をすればいいだけの話である。それだとさつきと変わらないが、違うのは、ユウコは一人しかないのが、恋愛というものはそこら辺に転がっているところだ。たとえば小説やマンガ。ドラマや映画。ゲームにだって恋愛モノがある。実際に別の女に惚れて、恋愛を経験した後ユウコに相対するわけにはいかないが、恋愛映画を観て、いわゆる疑似恋愛をするぐらいならば道徳的にも倫理的にも咎められるおそれはない。

早速俺は財布を引っ掴み、映画館へと出かけた。ドラマの恋愛モノは時間がかかる上に、なんだか安っぽい感じがする。映画ならば二時間ほどで終わる上に、なんともこだわってそうだ。スクリーン一杯に広がる大恋愛を真正面から観て、恋愛に対する免疫を高めるのだ。

映画館の前に立ち、俺は唸っていた。果たしてどの映画を観るべきなのだろうか。

恋愛を主題に据えた作品は三つもあり、一つがハリウッド謹製のスケールの大きそうな話。もう一つが、イギリスのコメディ色の強いもの。最後が邦画で、昭和中期の日本を舞台にした、しつとりと落ち着いた雰囲気作品。都合良く高校生男女の恋愛映画というものはなかった。

何も考えずに家を出たが、上映開始の時間までは後十分という好都合。しかし、観る映画を決めていない俺にしてみれば、タイムミンが悪かった。

俺は日本人なのだから日本の映画を、と思っても、時代がかった昭和の話を果たして受け入れられるかどうかは怪しい。ハリウッド謹製の作品は大恋愛の様子だが、舞台があまりにも大きすぎる。タニタニツク並だ。俺とユウコのあまりにも普通すぎる状態とは違い

すぎて参考になりそうもない。かといって、別に俺はコメディのよ
うなお気楽な人間関係について悩んでいるわけでもない。

「うあ……やっぱ熊を倒しときゃよかった」

思わず一人ごちて、空を仰ぎ見る。そんな折であつた。

「カナブン」

ふと、随分と庶民的な渾名で呼ばれ、俺をそう呼ぶ人間が一人し
かないことに気付き、俺は驚きのあまり思いきり後ずさつた。

「ユ、ユ、ユウ……」

「奇遇だな。何をしてる？」

学校帰りであろうか。ユウコは制服姿であつた。俺は一度家で着
替えているので私服である。

「えつと……ああ、えと、その。え、映画を、だな……」

まったくの予想外の遭遇に、俺はひたすらに焦つた。全然まとも
に喋れていなかったが、映画館の前で、映画と口に出したので、お
およその見当はついたのだろう。ユウコは頷き、とんでもないこと
を聞いてきた。

「今から観るのか。どれ？」

ここで質問だ。高校生の男が一人で恋愛映画を観る。これに対す
る女性の感想はどうであろうか。答えなくても良い。俺ならそんな
ヤツと口をききたくない。

「あー、まあ、そう、だなあ。と、特に決めずに、きたから」

「ん。そういうのは、面白そうだな。一人でか？」

「あ、ああ。うん、一人だ」

ユウコは少し考える仕草をして、次に腕時計を確認した。その様
子を眺めるだけで俺の心臓は秒間三十回は脈打っている。早死にし
そうだ。

「少し、時間に余裕がある。よければ、付き合ってもいいか？」

「へ……？」

淡泊な様子で、俺に提案してきたユウコの顔を、普段ではあり得
ないほどにまじまじと見つめてしまふ。ユウコが、俺と、映画を観

たいだと？

「ああ、嫌ならいい。一人で観るのが好きなら、邪魔するつもりはない。本屋で時間を潰すだけだ」

「や、や、まさか。全然いいぞっ！」

「そうか。じゃあ、どれにしようか。何も決めていないのはいいが、もうすぐ上映時間だろう？」

「そ、そそそ、そうだな。ええと、ああ、うん。ユウが決めてくれないか。迷ってて、決められそうもない」

俺は完璧に舞い上がってしまい、もはや真つ当な判断ができなかった。気付けば、ユウコに問題を丸投げしてしまっていた。

「私の好みに合わせなくてもいいんだけど……カナブンは紳士だな。では、英国紳士というほどだから、イギリスの映画にするか」

ユウコは実にアツサリと、イギリスのラヴコメディを選んだ。なんと。疑似恋愛でユウコと向き合う力を得ようと思って、まさかユウコ本人と恋愛映画を観ることになるうとは。

「この手の映画は、普段観ないし。男女の連れなら、変な目で見られることもないだろう。嫌なら別のにするが？」

「や、や、嫌じゃない。そ、そろそろ入ろうぜ」

ユウコのさりげなく呟いた「男女の連れ」という言葉に、俺は内心で身体が爆発するほどの感動を噛みしめながら、映画館に歩を進めた。

ここで一つ、俺は認識を改めなければならない。

ラヴコメディというものは、恋愛を面白おかしく仕立て上げたものだと思っていた。つまり、笑いながら観ることのできる、真に迫るモノではない、と。

しかし実際は、確かに面白おかしいストーリーではあるのだが、真に迫るものでもあった、ということだ。単に面白いだけではない。恋愛という人の心が最も揺れ動くものを題材のひとつとして扱っているだけある。揺れ動く人々の仕草に、何らかの共感を与え、それがそのまま笑いにも繋がる。

笑うシーンは、決して滑稽なだけではなく、どこか自分と重ねてしまったり、憧れてしまったり。シリアスなシーンで突然、腹の音が鳴ると、そりや笑いも起きるが、本人は必死である。むちゃくちゃ恥ずかしい。その羞恥に染まる顔もまた、ひとつの笑いの要素なわけで、これは人の心を理解していなければ作ることができないものだ。

というのがユウコの弁である。ユウコの言葉が全てを正解だとは思わないが、少なくとも、世俗的な恋愛モノとしか捉えていなかった俺にとっては、ユウコの語るラヴコメ論は確かな衝撃を与えた。

ただ、残念なのはユウコと二人で映画を観るということに思いつきり緊張してしまい、内容なんか何も覚えていないということだった。一言で一緒に映画を観るというが、実は多くの出来事がある。

なんとといっても、隣に座るのだ。しかも暗闇で。ポップコーンは一人で食べきれぬ大きさをなかったせいで、二人で同じ容器から食べた。あまつさえ、一瞬だが肩が触れ合ってしまった。こんなことがあって、スクリーンに気が行く余裕なんてあるはずがない。二時間、心臓が弱音を吐くほどポップ運動を繰り返した。確実に三年は寿命が削れただろう。無論、その三年など惜しくもない二時間だっ

たと自信を持つて宣言できるが。

「ふむ、いい時間だな。助かった」

ひとしきり、ユウコは映画についての意見を述べた後、腕時計を確認して頷いた。助かった、というのは何故だろうか。俺は首をかしげ、思わずユウコの顔を真正面から見た。

「ど、どうかしたのか。助かったって……？」

「ああ。少し家に居辛くてな。なるべく遅く帰るようにしている。料理部に入ったのもそのため。今日は顧問がいなくて活動できなかったから、どうやって時間を潰そうかと考えてた。カナブンがいて助かった」

「そ、そう、か」

家に居辛い、という感覚を俺は理解できなかった。俺の家は家族仲がよく、両親は理解があり、妹は年の離れた俺を未だに理想の人と掲げるほどだ。

だが、世の中の家族がみんな、そういうわけじゃないというのはわかってる。たとえば大塩の家は父親がアル中で、母親は大塩がまだ小学生の頃に出て行ってしまっている。家族の愛なんて知らねーよ、と明るく語っていたが、怠惰な父と、薄情な母に憤りを感じていることぐらいはわかった。俺は、そういう意味ではとても恵まれた人間だとも思う。

そして、大塩や、目の前にいるユウコの気持ちは、俺の味わったことのないものだということも、わかってる。故に、生半可な言葉をかけてはいけない。

「俺は普段から暇してる。こんぐらいでよけりゃ、いつでも呼んでいい」

それでも、好きな女が困っているのを、ただ黙って見るしかない状況になんて、したくない。便利な男だと思われてもいい。下心が無いと言えは嘘になる。だが、それでも俺がユウコの助けになるなら、下心が見抜かれても構いやしない。

「カナブンは、中々優しいな。しかし、あまりそういう態度を取っ

ていては、シズクに妬かれてしまう」

「シズク？」

聞き覚えのない言葉に、首をかしげる。しかし焼かれるとはまた、相当にバイオレンスな話だ。果たして焼かれるのは、俺のなのか、ユウコなのか。俺は別に焼かれたぐらいでは死なないので構わないが、ユウコに火傷の一つでも負わすというのはならば、逆に俺がそいつを火山に突き落としてやる。

「……まさか、付き合っている女の名前まで覚えられないわけではないだろうに。照れ隠しか？」

「は？」

ユウコがやや呆れたように呟いた。正直なところ、ユウコの言葉が理解できなかった。

「えと……付き合っている女って、俺と、か？」

「シズクと付き合っているんじゃないのか？」

「……シズクってのが誰かはわからないが、少なくとも俺は誰とも付き合っていないぞ？」

見ず知らずの女と付き合っていることになっていたのか、俺は。冗談ではない。俺が好きなのは目の前にいるユウコだけで、ユウコ以外の女に何の興味もない。付き合うはずがない。たとえ美人で性格がよくて、あまっさえ金持ちの女が告白してきたとしても、何の迷いもなく断るだろう。

「とりあえず、シズクというのは、同じクラスの小早川雫だ。ええと、アイドルとか言われている。カナブンも仲が良いだろう」

「ああ、アイドルか。そういや、シズクって名前だったっけ。それこそありえねえ。俺とアイドルはただのライダーキックの同志で、近所に住んでるだけだ。仲が良いというのは、まあ、そうかもしれないが」

「……シズクがライダーを観ると思えないけど……まあ違うのなら、それでいいか。ふと、そういう噂を聞いたから。今日は渡りに船で、時間潰しに協力してもらったけど、流石に呼び出して付き合

つてもらうのは、恋人に申し訳ないから」

俺とアイドルが付き合ってるって、どんな噂なんだ。

確かにアイドルはアイドルと言われるだけあって、美人だ。美人って言葉と、かわいいって言葉が両方あてはまるような、完璧な美人だ。誰にでも優しいし、金持ちっていう噂もある。

だが、俺は目の前でぼんやりとした様子を見させているユウコに惚れているのだ。アイドルのことなど、恋愛対象としてこれっぽっちの興味もわかない。アイドルにしても、不名誉なことだろう。何を好きこのんで、俺と交際しているという噂を流されねばならないのだ。あいつならば、周防のような男前でなければ釣り合いが取れない。

「一体、誰だよ。そんな根も葉もない噂を流したのは」

「周防だ」

「周防か」

周防と付き合っている噂が流れるなら解るが、その周防が何故、俺とアイドルが付き合っているという噂をするのだ。真横でいつも観ていただろうに。

「しかし、私に構うなら、シズクと遊んでいたほうがいいだろうに」
「いや。そんなことはない」

ユウコと一緒にいられるならば、それが俺の最高だ。世の中の真理を改めて断言するまでもないか。

「……まあ、いいか。じゃあ番号とアドレスを送る。時間が空いたら連絡するでしょう。それでなくとも、暇なときに、ウィットに富んだユニークなメールでも送ってくれ」

ユウコが携帯電話を取り出し、ボタンを操作して赤外線通信を呼び出す。なんとということだ。話の流れ上ではあるが、念願の番号とメアドがゲットできてしまった。

俺も慌てて携帯電話を取りだして、赤外線通信の画面に設定した。俺の携帯よ、お前は今からユウコの携帯と一瞬だが、赤外線を通して一つになるんだ。これほど幸せなことはないだろう。今夜は握

りしめて一緒に寝てやるぞ。

「よし。では、また月曜にな」

「あ、ああ。またな」

軽く手を挙げて、ユウコはすたすたと帰路に就いていった。俺は感動に打ち震えたまま、その様子をしばらく見送る。

「けど。ウィットに富んだユニークなメール、か。アイドルに要求したものの、何を送ればいいものやら」

こうして俺はまた、一つの難題を抱えた。

a c t 2 ラヴコメ論 5（後書き）

少し間が空いたので、二話連続投稿となりました。
定期更新を心がけているのですが、生活が安定せず、うまくいきません（汗

act 3 料理と先生 1

好きな女の子にメールを送るというのは、すごく勇気の要ることだ。メール自体にさほどの魅力を感じない俺にしてみれば、その目的は則ち、ユウコとの仲を深めたり進展させたりすることにある。意味のないやりとりでは駄目なのだ。

「おはよう、金池君」

とまあ、無い知恵を振り絞ってユウコに送るメールを考えているうちに土日が過ぎてしまった。例の如く、家からほど近い場所でアイドルが俺を捕獲して、今日も一日が始まる。

「おはよう、金池と小早川。どうだ、一皮剥けたか？」

「おはよ。シズクとカナブン」

教室にはいると、既に周防とユウコが来ていた。二人して、世間話でもしていたのだろうか。ユウコが俺の席に座っていた。俺は半ば当然ながら、今日一日、椅子に座ったが最後、放課後まで一度も立ち上がらないことを決意する。

そんな決意とは別に、周防とユウコのツーショットに、当然俺の心は激しく揺れている。旧知の間柄であることは知っているが、朝の教室で二人きりの会話を交わすほど、深い仲だったとは思っていなかった。もしかすると、この二人は、こっそり影で付き合っているのだろうか。

「二人で登校とは、中々熱いな。こっそり影で付き合っているんじゃないのか？」

周防が俺の心を見透かしたかのように言う。ただ、言葉は同じだったが、対象は俺とアイドルだった。

確かに、言われてみると朝から一緒に登校する男女となると、そう見られてもおかしくないのかもしれない。だが、俺とアイドルが交際しているはずもない。つまり、ユウコと周防もそう見えてもお

かしくないだけで、付き合っただけでないはずだ。そう信じるしかない。

「あはは、実はそうなんだ」

「やめろ。冗談でもそんなこと言うと、殺される」

アイドルが冗談で肯定したところを、俺が間髪入れずに否定した。その僅かな間で、周囲に殺気が湧き、それが俺に一斉に向けられるという事態が、俺の言葉が冗談ではないことを物語っていた。

まあ、ユウコにメールをするという難題を抱えたものの、日常はさして変わらない。

周防や大塩と世間話をして、アイドルが会話に加わり、たまに陸上女も混じったりする。肝心のユウコは、たまにふらっと現れて、少し喋ったりする程度だ。

何かしらの変化でもあれば、それをネタにすることもできるのだが、メールを送るほどのことがあるわけでもない。まあ、ユウコも別に俺からのメールを心待ちにしているわけではあるまい。まだアイドルからの挑戦状である暗号の解読もできていないわけだし、取り急ぐ必要もない。

「今日は妹と出かける用事があってな。先に失礼する」

気付けば放課後。周防はホームルームが終わるとすぐに教室を出て行ってしまった。周防は妹を溺愛しているのだ。

なんせ、両親が離婚して、周防は母親に引き取られ、妹は父に引き取られたということで、滅多に会えないらしい。五つ下の妹を心から愛している周防は、何よりも彼女を優先する。勿論、愛していると言っても、それは家族愛だ。

「これで、モテる要因になるんだから男前ってのは羨ましいもんだ」
いつしか隣に来ていた大塩が、言葉とは裏腹に微笑ましい目で周防を見送っている。少々朴訥だが、家族思いの優しいイケメンは、大抵の女子に好かれてしまう。

本来ならば、大塩はもう少し悔しがるのがだろうが、大塩と周防は

家庭環境が似ている。そもそも、このタイプの違う二人が仲が良いのも、そのせいだろう。周防と妹が仲睦まじい様子を好ましく思っている。

家族仲という点で言えば、ユウコも家庭に事情があるらしいし、まったく、俺の周りにはそういう人間ばかりだ。俺自身は、両親や妹とは仲が良いと自負している。ふと気になってアイドルにも聞いてみた。

「お前の所の家族は、仲が良いのか？」

「けっこう良いと思うよ。弟なんて、すごく可愛いし」

「……まあ、お前の弟ならさぞかし美少年だろうな」

ナイスミドルな父と、年相応の美しさを持つ母。さらには紅顔の美少年たる弟に囲まれるアイドルが簡単に想像できる。これだけの美人になるには、相応の遺伝子が必要だろう。家族全員が美男美女に違いあるまい。

結局、周防といういつもの面子がないことで、俺達は別々に帰ることになった。アイドルは同じクラスの女子連中と一緒に。大塩はいつの間に仲良くなったのか、男連中と一緒に。

「金池も一緒に帰るか？」

帰りがけに大塩に誘われたが、あんまり知らない人間と一緒にいるのが得意でないので、丁重にお断りしておいた。そんなのだから友達が出来ないんだと大塩に言われそうだが、生憎、これ以上友達を増やしたいとも思っていない。

クラスメイト達を見送り、俺も帰ろうかと思っていたところで、不意に担任が教室にひょっこりと顔を出した。

「おう、金池。暇か？」

まるで同じ年の友達に声をかけるような気軽さで、担任は俺に近づいてくる。

「暇っすけど、どうしたんスか？」

「教師としちゃ、勉強でもしとけって言うべきなんだろうが。まあ

「いや。ちよいと付き合えよ」

「いよいよもつてただの友達感覚である。親しみやすいのは良いことだが、そこには聖職者としての自覚らしきものは見当たらない。それでも、この担任は締めるところはきちんと締めるので、我がクラスの人間からはけっこう信頼されている。俺だって嫌いじゃない。ま、ちよいとした役得にもなるかもな。小腹が空いてるなら、尚更だ」

「茶菓子でも出るんスか？」

「にやりと笑う担任に、俺は訝しがりながらも、小腹が空いていたのも事実であつたので、素直についていくことにした。」

act3 料理と先生2

「どうだ。俺の名前、覚えたか？」

廊下に出て、どこだかわからない目的地に向かうあいだに、担任が既に十回は繰り返した質問をまたしてきた。

「ええと。確か、西田啓二とか、そんな感じだったような」

「仁科恵一な。ちょっと近かったけど、完璧に別人だぞ、それは」
そうだ。仁科恵一教諭だった。どうやら俺は名前を覚えるのは下手だが、渾名を覚えるのは得意らしい。アイドルや陸上女はその最たる例であり、仁科教諭の場合は、渾名以前に担任という解りやすい言葉がある。逆に周防や大塩は、特に渾名がなかったものだから無理矢理名前を覚えたわけで。勿論、ユウコは別格だ。

「それで、どこ行くんスか？」

「ああ。俺、料理部の顧問になったんだがな。ちよいと今日のメニューは量が多そうで、よく食いそうな男子生徒を拉致してこようと思っただけだ」

初耳である。料理部の顧問なんて、普通は家庭科の教師がするものだろう。担任は確か、社会科の教師だったはずだ。

「それでも料理は得意なんだぞ。今でも彼女に三食作ってるしな」
担任は少し得意そうに言った。いや、それ以前に。

「彼女、いるんスね」

「ああ。言ってなかったか。美人だぞ」

そんなことを教え子に嬉しそうに語るのもどうかと思うが、このフレンドリーさが持ち味のようなものなのだろう。しかし、三食作ってるとは、料理好きも甚だしい。

「昼飯も作ってるんスか？」

「弁当を持たせてある。今日は竜田揚げをメインに、自家製のぬか漬けとひじきの佃煮を添えた。どれも味が染みてて、冷えても美味い仕上がりだぞ」

「先生、主婦っすね」

いい加減な感じの人物だと思っていたので、飯と言っても、いわゆる男の料理という手合いかと思っていたが、なんともお母さんじみたメニユーである。

「まあ、主夫みたいな生活してたからな。料理はちゃんと習ったさ。まさかそれで顧問に任命されるとは思っちゃいなかったが」

主夫とはこれ如何に。案外、どこぞの大富豪の令嬢のメイドでもやっていたのかもしれない。いや、執事か。

俺が不思議そうな顔をしているのを見て、担任は苦笑した。そうこうしているうちに目的地である家庭科教室に到着する。

数人の女子がいそいそと調理の準備に取りかかっているところだった。材料を見るからに、ハンバーグというところだろうか。好きなメニユーである。

「ようし。準備はあらかた終わってるな。余ったり失敗したりしても、この金池が全部食ってくれる。けどまあ、どうせなら美味しい飯にしようぜ。じゃ、始めようか」

一斉に「はい」という元気な声が聞こえて、女子連中が調理に取りかかる。飯を食わせてくれるのは有り難いが、今から作るとなると、けっこう時間がかかるだろう。さて、どうしたものか。

「待っているのも暇だろう。ちよいと手伝ってこいよ」

担任がエプロンを身につけながら、軽い調子で言う。飯を食わせてくれるから付いてきたのに、何故手伝わなければならないのか、甚だ意味が不明である。

「んー、なんで俺が手伝わないといけねえんだよ、ってツラだな」

「まったくもってその通りっすね」

「別にいいじゃねーか。料理だって多少できいたほうが、女の子にモテるぞ」

そう言われると、つい想い人を脳裏に浮かべ、俄然やる気になってしまふのが恋する男の悲しい性である。^{さが}気付けば担任のエプロンをひったくり、やる気満々になってしまっていた。

「さあつてと。んー、あそこの連中が人が足りてないみたいだし、手伝ってきます」

「……ああ。いいけどさ」

俺は早速、二人で調理を進めているところに向かった。二人とも知らない女であるが、先ほどのやりとりを聞いていたらしい。笑顔で迎え入れてくれた。

「料理したことある？」

「んー。まあ、それなりだな」

手を洗いながら答える。机の上にある食材を見ると、玉葱と人参に合い挽きミンチ。そこに大根があるのは、大根おろしでも作って、ポン酢で食べる算段というところか。御丁寧にシナモンまで揃えている。

「えっと。とりあえずまだ野菜洗ったところだな。適当にみじん切りにしておく」

並べてあった包丁を手に取り、玉葱を水にさらしてから、細かく刻んでいく。

「え……？」

隣で見ていた女が、不思議そうに俺の手元を見つめていた。何故、手伝いの俺が始めているのに、こいつは呆然と見ていただけなのだ。もしかして、俺が何か間違えていたのだろうか。

「手順とか、間違えてたか？」

「ううん。そうじゃなくて、随分と手馴れてるなあって思っただけ」

「あー。まあ、料理ぐらいできねえと、モテねえみたいだしな」

伊達にファミレスでバイトをしていたわけではない。ファミレスの割に随分本格的な料理ばかりを並べるところだったもので、皿洗いでもさせられるだろうと思っていたのだが、気付けば魚の三枚おろしを教え込まれるわ。野菜の切り方を数時間も練習させられるわと、散々だった。

おかげさまで、担任ほどではないのだろうが、それなりに料理はできるようになってしまった。ハンバーグなんて定番メニューだ。

仕込みから焼きまで、全部一人で出来るぐらいだ。バイトは春休み限定だったので辞めたが、夜中に小腹が空くと、自分で料理ができるものだから、今でも割と包丁を握っている。

「すごい……私たちより、早いよ？」

「一日で百食ぐらい、作ってたからな」

喋っている間に、玉葱を刻み終わり、人参に取りかかる。そこでようやく他の二人も思い出したように調理に取りかかった。しかし、「あー、シナモンの量、もうちょっと多くしたほうがいい。大根おろしはもつと優しくおろしてやれ」

気付けば、俺が指導するという不思議な展開になっていた。料理部の面々も妙なことに、真面目な顔をして頷き、俺の言葉に従っている。俺は本来、小腹が空いたからここまで来て、暇だから手伝っているだけに過ぎない存在だったはずだ。

「なんで俺、陣頭指揮とかやってんだ？」

「楽でいい」

沸々と湧き出た疑問を口にしたら、背後から不意に言葉が返ってきた。

淡々とした調子と、ぶっきらぼうな口調。振り返らずとも、その言葉の主が誰だかわかってしまい、一瞬心臓が止まった。

「ユ、ユウ……？」

「やー。カナブン」

しゅたつと手を挙げて——そんな気軽な様子とは裏腹に無表情なユウコがそこに立っていた。何故だ。

「おう、高山。遅いぞー」

担任がひらひらと手を振り、ユウコもそれに応えて手を挙げる。そう言えば、ユウコは料理部に所属しているとか、新学期早々の自己紹介で言っていたような気がする。なんということだ。この俺が、ユウコに関することで何かを失念するなんて。これでは未来の旦那失格である。俺は結婚記念日を忘れるような夫にならないと固く決意しているのだ。

「この失敗は……料理で取り返す」

人間、失敗の一つや二つ、やってしまうのは仕方のないことだ。落ち込んでいても始まらない。要は、その失敗をどう穴埋めするか。どのようにプラスにまで引き上げるかである。

見るに、俺の料理の腕はこの中でもかなり上位のようだ。ならば、ここでビシッと料理の腕前を披露すれば、ユウコのハートも俺に戻ってくるに違いない。

いや、待て。別に失敗したと思ってるのは俺だけで、ユウコのハートはどこにも行っていないし、それ以前にまだ俺のところにも来ていない。結婚記念日を忘れないユウコの夫になる日は、まだ先の話だ。

まあ、それでもここで料理の腕をアピールして悪い結果になることはないだろう。素早い微塵切りでもよし。丁寧な焼きでもよし。さあ、ユウコ。俺の料理魂をとくと見てくれ。

「少し用事で遅れたが、もう大丈夫だ。カナブン、代わるよ」
嗚呼、せめて鮮やかな手ごねでもいいから、見せたかった。

act 3 料理と先生3

結局、ユウコが来たことで俺が手伝う必要はなくなり、担任と雑談をして過ごすことになった。

「実は、今日のメニューは俺のオリジナル要素があつてな。千晴もこれが大好きなんだ」
ちはる

「先生の彼女、千晴サンっていうんすね」

「おう。可愛いぞ。写真見るか？」

生徒相手に惚気とは、とんでもない教師だ。だが、それだけに担任と付き合っている女というのは、どんな人物なのかということも気になる。

「今、あるんすか？」

「おう。ちよつと昔の写真だな」

担任はワイシャツの胸ポケットから手帳を取りだし、そこから一枚の写真を抜き取った。恋する乙女みたいなことをする男である。しかし、いつでもユウコの顔を見ることができるなら、それも悪くない。今度、ユウコの写真を手に入れたら生徒手帳にこっそり仕込んでおこう。

「ほら、これだ。千晴が高校を卒業してすぐに撮ったやつ」

担任が写真を見せてくれる。なるほど、少し背は低いが、相当の美人だ。

高校卒業すぐということとは、十八歳だろうか。童顔だが穏やかな空気を纏っていることが写真越しでも伝わる上に、ぱっちりとした目元や照れたような表情がまた可愛らしい。しかし、この人の顔はどこかで見たことがある。

「……芸能人、すか？」

「へ。いや、違うけど。まあ、芸能人並に美人だろ？」

「ソコは否定しませんけど、顔に見覚えがある気がして。テレビだけかなあ」

バラエティ番組じゃなく、どつちかというところとニュース番組で見たような気がする。ユウコに見合うだけの教養のある人間になるために俺は、夕食の時はいつもニュース番組を見るようにしているのだ。「あー、そうかそうか。そういや、テレビ出てたな。ドキュメンタリーだったろ」

「あ、そうっす。ニュースのドキュメンタリー。確か、弱冠二十二歳。鈴ノ宮財閥に女社長就任……は？」

言ってから、自分の口から出た言葉に驚いた。鈴ノ宮財閥。名前を覚えるのが苦手な俺ですら知っている、世界でも名だたる大財閥だ。去年の暮れに会長の一人娘が系列の出版社の社長になったとかで、大きなニュースになったのだ。

その女社長の名前が、確か鈴ノ宮千晴。ぱっちりとした目元と、愛くるしい仕草が印象的だったので、ちよつと憧れたりしたのだ。

「先生の彼女、千晴サンっていうスよね？」

「さつきも聞いただろ、それ」

担任は涼しい顔でしれつと言う。間違いない。

この男。大財閥の令嬢で、しかも社長の肩書きまで持つ女と付き合ってたがる。

確かに男前ではあるが、一介の県立高校教師が何故、そんなセレブも真つ青な人間と付き合ってるんだ。

「ま、男と女に縁があれば、恋愛にも発展するさ。別に相手がお姫様だろうが村娘だろうが関係ねえ」

ちよつとキザな台詞を呟いた担任を観て、俺は思わず息を呑んだ。俺は、担任を格好いいと思ってしまった。容姿だけではない。その人間性——強いて言うならば、男気にだ。

男が女を愛するのには、地位も名誉も富も関係ない。ただ、単純に愛すればいい。担任はずっと、そんな持論を掲げて生きてきたのだろう。いや、むしろそれを持論ではなく、ごくごく自然な、常識として認識するほどに、真つ直ぐに彼女を愛している。

なんて格好いいんだろうか。これこそ、純粋な愛の形だ。ただ、

人が人を好きになるということを体現した人だ。この人こそ、恋愛の師と仰ぐに相応しい。

「えっと……西田先生」

「仁科だ。仁科恵一。まったく、何度言えば覚えてくれるんだよ。千晴の名前は覚えてたクセに」

仁科教諭は呆れたように肩を竦める。いけない。人生の師の名前を間違えるとは、なんという失礼。俺はもう二度と先生の名前を忘れない。

「仁科先生。俺の恋愛の師匠になってください」

「は？」

「感服したんすよ。俺、先生についていきます」

ぽかんと呆けた様子の仁科教諭の手を、ぎゅっと握る。美しい師弟愛が誕生した瞬間だった。

「……ま、いいか」

仁科教諭はぽりぽりと頭を掻いた後、二つと男らしい笑みを浮かべて、俺の肩を抱くと、小声でぼそりと呟いた。

「高山は千晴より強敵だぞ？」

俺の目に、狂いはなかった。

俺がユウコに惚れていることを、どうやって仁科教諭は知ったのだろう。よくわからないが、教諭曰く「なんとなくわかる」そうだ。恋愛にお盛んな高校生を指導する立場としては、中々便利なスキルではあるのだろうが、逆にわかってしまうと色々と気苦労も多いのではなからうか。

「大塩がアイドルに惚れてるみたいなんすけど、見込みありますか
ね？」

「んー。今のところ、欠片もねえな。まあ、ありゃあ本人もわかってるし、そもそも恋愛ってほど大層なもんでもないだろ。美人が好き
なただけだ」

仁科教諭の言葉は不思議と説得力がある。

「それよか、その小早川のほうが大変だな。相手が馬鹿だから苦労する」

「小早川？」

「アイドル、だっけか。いい加減、覚えてやれよ」

なんと、あのアイドルが恋愛において苦労するとは。まあ、相手が馬鹿ならば仕方ないのかもしれない。きつと、アイドルのアプローチなど全く気付かないで暢気に過ごしているのだろう。あれだけの美人に言い寄られて気付かないとは、いよいよもって大馬鹿確定である。

「まあ、高山に今のところ、それっぽい雰囲気は無いな。お前次第でことだ。応援とかはしないが、教師らしく見守ってやるよ」

なるほど。ユウコに現在、恋人がいないことがわかっただけでも嬉しいものだ。俺はまだまだ、自分がユウコに見合うだけの男だとは思っていない。これからの俺次第ということは、つまり無限の可能性があるということだ。

「勉強もすっかりしろよ。頭の悪い男は嫌われるからな」

これは、教師としての目論見も混じっている言葉なのだろうが、確かに俺も勉強が全然出来ないユウコよりも、けっこうできるユウコであってほしいと思う。帰ったら勉強しよう。とりあえず学年トップぐらいならば、ユウコに見劣りしないだろう。

仁科先生としばらく喋っている間に、ハンバーグが完成した。本来の目的である試食と相成ったわけだが、手伝った関係上、俺はユウコの班にお邪魔することになった。

ここにきて、俺はまた恐ろしいことに気付いてしまった。目の前で湯気をたてているハンバーグは、なんとユウコの手作りであるのだ。

半分以上は俺自身が作ったようなものでもあるが、仕上げの焼きはユウコがやっていたのを、俺はしっかりと目視している。ともすれば、このハンバーグは俺とユウコの共同作業の結晶とも言える。

「……うつっ！」

思わずむせび泣きそうになり、熱くなった目頭を押さえる。苦節十七年。この日のために、俺は生きてきたのだろっ。

「金池君だっけ……大丈夫？」

突然涙を零した俺を、同じ班だった女子がやや怯えた目で見ている。ユウコの手料理を食べる機会を前にして、少々感極まりすぎたようだ。俺は慌てて笑顔を作り、何でもないことをアピールする。

「金池君、面白いねー」

「うんうん。料理も上手いし、料理部に入っちゃえばいいのにー」

俺の笑顔が功を奏したのか、和気藹々とした様子で、それぞれが箸をハンバーグに伸ばす。ユウコもちまちまと箸でハンバーグを小さく分けて、口に運び出した。

「うん。いい出来」

ユウコも満足の様子である。俺も箸を手に取り、ハンバーグを口にする。

シナモンの香りと、丁度良い塩梅の塩胡椒が絶妙な点に関してはもう自分を褒めるしかない。仁科先生お手製というレシピもかなり研究されているようで、これも流石である。そして何よりも、ユウコの焼き加減が最高だ。芯までしっかり火が通っているが、決して焼きすぎておらず、柔らかい肉と、ジューシーな肉汁の素晴らしいコラボレーションが口腔を支配していく。今まで食ってきたどんなハンバーグよりも美味かった。そりゃそうだ。愛して止まないユウコと、尊敬する仁科先生。そしてこの俺が力を合わせて完成させたようなモノなのだ。至高の逸品にならぬはずがない。家で真空冷凍して、永久保存しておきたいほどだ。

「先生、タッパで持って帰りたいんすけど」

俺の真剣な言葉に、何故か周囲から笑いが起きる。

「金池君。そんなに気に入ったの？」

「料理部に入れば、週に三日は作ったもの、食べられるのに」

入っちゃえ、入っちゃえ。と、近くにいた女子から誘われる。な

るほど、料理ができればモテるといふのはこういうことか。

しかし、残念ながら俺はいくらユウコが在籍しているからと言っても、部活動をするつもりはない。元々、縛られるのが嫌いな性格だし、料理の腕も今のところ満足している。料理人になりたいわけでもないの、最低限のものが作ればそれで良いのだ。

ちらりと、ユウコを見る。ユウコだって、まだまだ仲がとても良いという関係に至っていないのだ。別に俺が入部したところで、さほど喜ばないだろう。何よりも、同じ空間にいただけで全身麻痺するほどに胸が高鳴るのだ。放課後もずっと一緒に料理を作るなどとなれば、鼻血が止まらなくなる。

「カナブンが入れば、楽しいだろうな」

「じゃあ、入部するか」

ユウコがぼそりと呟いた瞬間に、何故か俺の口が勝手に動いていた。もう条件反射としか言い様がない。

「よし。じゃあ、入部届は俺が勝手に作っておく。金池は今日から料理部の副部長な」

まるで、逃がすまじとでも言うように、仁科先生がにこやかに恐ろしいことをたまった。入部するのは今さっき自分が宣言したから仕方ないとしても、何故いきなり副部長なのだ。

「中々、副部長って感じのヤツがいなかったんだよ。部長ってのは、どんなときもドンと構えてられるような人間が適任で、副部長は走り回れるヤツか、完璧なサポートタイプかに別れる。金池は、走り回る副部長としてぴったりなんだ」

仁科先生の言葉に、周囲の部員達も一斉に頷く。

「いや、おかしいでしょ。そりゃまあ、走り回るのは嫌いじゃないけど、まだ右も左もわからないんスよ？」

「料理の腕も、十分認められてるみたいだしな。文句のつけようがないし、適任だとも思う。どうだ、金池。先生の頼みだと思って、引き受けてくれないか？」

仁科先生が人なつっこい笑みで俺を見る。尊敬する仁科先生にそ

んなふうになると、俺としては断りようがないではないか。

「……わかりました。そこまで言うなら」

こうして、俺はひょんなことから料理部に入部して、三分と経たぬうちに副部長に任命されてしまったのである。

a c t 3 料理と先生3（後書き）

仁科恵一・鈴ノ宮千晴についてですが。

知らない人はごめんなさい。拙作「御主人様は中学生」の主人公とヒロインです。続編ではないのですが、その後の彼ら、ということ
でw

幕間 友達になろう

「とりあえず、新しく副部長になったからには、生徒会にも報告しとかにやな。副部長としての初仕事になるから、気張っていけよ」

という仁科先生の言葉を受けたのが、入部した翌日のことだった。そういうわけで、俺は放課後に料理部の部長と二人して生徒会室までやって来ていた。

「生徒会とは、予算会議とかで戦う敵であって、行事とかじゃ色々面倒を見てくれる仲間でもあるわ」

「つまり、無礼過ぎても、妙に卑屈になって弱々しくなっても駄目ってことだな」

「話が早くて助かるわ。生徒会長は話のわかる人だけど、頭も相当いいから、下手な小細工はしないほうがいいわ。まあ、金池君なら素でやれば大丈夫かしら」

部長は男勝りな笑みを見せると、生徒会室の扉をノックした。

なるほど。どんと構える人間が部長に相応しいと仁科先生が言っていたが、この人はかつこいいと言言葉が似合うぐらいに、どんと構えている。

さて。その頭の良くて話がわかる生徒会長というのは、どんな人物なのだろうか。

「なるほど。先日、料理部の副部長が転校したと言っていたね」

俺と部長の応対をしたのは、まさしく生徒会長その人で、名前は不破俊彦（ふわとしひこ）というらしい。銀縁眼鏡をかけた上品な二枚目で、少々神経質そうな印象も受けるが、穏やかな笑みと落ち着いた物腰が中々の好印象だった。ちなみに、度々、壇上で見かける機会があったはずなのだが、人の名前を覚えられない俺である。生徒会長の顔など覚えていたわけもない。

体育祭が近いからだろうか。生徒会室に他の役員の姿は見当たらず

ない。会議室のようなイメージを持っていたが、普通の教室を二回り小さくさせて、ソファとパソコンと本棚を置いただけの質素な作りである。会長一人しかいないので、いつそう寒々しい。

「いや、申し訳ない。色々と忙しくてね。それにしても、入部した翌日から副部長というのはどういうことだろう。生徒会としては、きちんと役職をこなしてくれば何の問題もないのだが、個人的には興味があるね」

会長が俺を真っ直ぐに見据えて言葉を紡いだ。台詞の割に顔に嫌味がないという珍しいタイプの男だ。にこにこしながら嫌味を言う人間もいるが、それとも違う。嫌味に聞こえそうな台詞を、嫌味にさせないような雰囲気を持っているのだろう。タチが悪い。

「とりあえず、ちゃんと役職をこなせるから抜擢されただろうな。後は、適当に走り回るつもりだ」

俺が答えると、会長はなるほどと頷いて、にこりと微笑んだ。男に微笑まれても嬉しくはないが、この男は神経質そうに見えて、意外と笑顔が人なつっこい。

「行動力のある人材は、どこでも重用されるものだからね。よければ、生徒会にも入らないかい？」

「走り回る人間を縛り付けてちゃ、意味ないんじゃないか？」

「……なるほど。一見すると考え無しにも思えるが、きちんと物事も考えられる上に、物怖じもしない。この際、生徒会なんかどうでもいい。僕と友達になつてくれないか？」

突然勧誘を始めたかと思えば、返す手で「友達になろう」と来るか。この男、優男のように見えて中々侮れない。正面切つて友達になろうなどとは、あの大塩でさえ言わなかった言葉だ。

「なつちやつたら？」

隣に座っていた部長が、あまりにも単純明快に言い放った。

「不破君が他人を気に入るのって、けっこう珍しいのよ。変人ばかり気に入るみたいだけどさ」

つまり、俺が変人だと言いたい訳か。

しかし何を隠そう、俺は自分が変人であることぐらい自覚はしている。大塩も周防も変人なのだから、その二人と友達である俺が変人でない筈がない。ユウコだってちょっと浮世離れた変人には違いないし、アイドルはキラキラ輝いているが、わざわざ変人グループに所属する俺達と親しくしている時点で、やっぱり変人だ。

類は友を呼ぶと言うが、そんな俺を気に入るとなると、やはり会長も変人なのだろう。過去の経験上、変人と気が合うのは承知済みである。

「よっしゃ。よろしくな、フジタ」

「……うむ。本の虫の次は、型破りの猪突猛進型ときたものだ。これだから人生はやめられない」

会長は実に楽しそうに笑った。部長が横で、本の虫というのは部長のクラスメイトである、大人しい男子だと教えてくれたが、どうせそいつも変人なのだろう。文芸部あたりに所属していて、ひよんなことから部員と交際を始めてしまうようなヤツに違いはない。

「ところでフジタ。実は俺、名前を覚えるのが苦手なんだが……」
「もう知ってるさ」

流石は友達だ。情報が早い。

act 4・道草奮闘記

料理部の活動は中々に面白い。

顧問の仁科先生が「定番から、ちょっとお洒落な料理まで」というコンセプトで指導をしているので、ハンバーグのような基本的なモノから、外国の郷土料理まで幅広く取り扱ってくれる。

「まあ、食材の買い出しが大変なんだけどな」

「じゃ、俺が行くッす」

高々食材の買い出し程度で仁科先生の手を煩わせるまでもない。

俺が申し出ると、仁科先生はいたく喜んでくれた。何でも、彼女さんが最近寂しがっているの、早く帰ってやりたかったのだという。ミッシヨンは簡単だ。仁科先生に貰ったメモ用紙に書かれてある食材を買ってきて、家庭科室に設置してある料理部用の冷蔵庫に放り込めばいいだけだ。

「ただ、部員の人数だけの食材だから荷物持ちが最低三人は必要だな」

「あ、それなら私も手伝います」

放課後に話し込んでいたので、教室だったのだが、話を聞いていたアイドルが拳手してくれた。

「書いてある材料って、近所のスーパーじゃ無理ですよ。デパ地下じゃないと……よく母に連れられて行っているの、案内できますし」

流石はアイドル。デパ地下を根城にする家庭に生まれているだけでも人生勝ち組だ。

「男手も必要だろう。幸い、今日は用事がない。俺も行こう」

「ん、なんか面白そうだし俺も行く」

周防と大塩も手伝ってくれるらしい。根っこのところで良いヤツらだ。もっとも、大塩はアイドルと行動を共にしたいという下心もあるのだろうが。

「ふむ。料理部のことなら、部員の私も行くのが筋だ」

ユウコ！

なんてことだろう。ユウコと俺がデパ地下で買い物ができるなど、もうそれは十年先の未来の話だと思っていたのがこんなところで叶ってしまうとは。

俺とユウコが結婚して、子供を連れてデパートに来て、和気藹々と食材を見て回る光景を何度夢に見たかわからない。

「じゃあ部費は副部長の金池に預ける。領収書は必ず貰ってくれ。あと、一応先生としては寄り道をすると言わなきゃならんが、学校が閉まる前にちゃんと戻ってくれば良しとする」

話のわかる仁科先生が、俺を含めクラス全員大好きだ。

若い男女が電車に乗ってお出かけするのだ。道草と寄り道はほとんど避けては通れないものだろう。

かくして、俺と周防、大塩。アイドルとユウコの五人は電車に乗り、二つ駅を跨いだ駅前デパートに足を運んだ。

色々と見て回りたいのだが、それは今度ユウコと二人で来たときにしよう。まずは仁科先生の信頼に応えるべく、食材の購入だ。

「目利きしないといけないほど、悪いモノは置いてないけど一応私に任せて欲しいな」

デパ地下に到着すると、アイドルがにっこり笑って言った。

基本的に完璧超人のアイドルが任せると言うことに異を唱えたりはしない。何をするのだろうかという好奇心はあったが。

「こんにちは、おじさん」

アイドルはにこにこと果物を取り扱う店に入り、その主らしき初老のおっさんに声をかけていた。

「やや、小早川さんのお嬢さんじゃありませんか。学校帰りですかい？」

職人氣質の初老の店主はアイドルを見て親しげな笑みを見せた。なるほど、アイドルは何度もここに通っているのだった。顔見知り

も多いのだろう。

「料理部で色々な食材が必要なんです。ちょっと見繕ってもらっていいですか？」

「へい、お嬢さんにそう言われちゃ断れませんや。ちょっと待っててくださいよ」

店主は俺が持っていたメモを見て、ふむふむと頷いた。材料からどんな料理を作るのかわかったらしく「それなら、これが一番いいやな」と言って、幾つかの果物を取り出してきた。

「火が通ったら、良い味が出る品種でしてね。調理にやもってこいです。しかし、部活動でこれを使うなんて、料理に詳しい先生なんでしょうねえ」

店主の薦めの果物は、あまり見ないものだったが仁科先生のメモに書かれたものである。品種まで指定されていないのだが、この店主はアイドルも信頼しているのできつと大丈夫だろう。

「問題ない。同じ品種でも持ってきたのが一番良いものみたい」
多少の目利きができるらしいユウコがそつと俺に告げる。

ああ、俺は今、ユウコとひそひそ話をしてしまった。ちょっとした秘密の共有らしくてたまらない。

「じゃあ、それを二十個ください」

「へい、毎度！」

こんな感じでアイドルの顔の広さを武器にデパ地下を歩き回り、あつという間に食材は揃っていった。

「これなら、ゆっくり寄り道できる時間があるね」

アイドルが嬉しそうに言う。既に買い物も終え、後は帰るだけだった。

本来なら荷物持ちだったはずの周防や大塩が手ぶらなのは「明日の放課後ですね。任せてください」という老店主の言葉のおかげだ。なんでも無料で配達してくれるらしい。一応、携帯電話で仁科先生に許可を貰おうとしたら、仁科先生が店主に代わってくれという。

「へい、ああ鈴ノ宮様んところの……へえ、へえ、あいわかりやし

た。それじゃあ明日の午後四時に」

仁科先生おそるべし。老店主とも知り合いだったらしい。困った俺の名前を出せと事前に言われていたのだが、こういうことだったらしい。

『そんじゃ金池、学校に帰ってこなくて良いから適当に道草して帰れ』

仁科先生が最後に電話口で俺を叱咤激励してくれた。これはつまり、この機会にユウコと少しでも距離を近づけると言うことだろう。仁科先生の好意を受け取らないのは失礼に当たる。全身全霊で道草をしてやろう。

俺たちは再び電車に乗り、陽桜駅に戻ってきた。

前はゲームセンターで遊んだが、どつちかという周防も俺もアイドルもユウコも静かな方が好きだし、大塩も全員が楽しめる場を選ぶ男である。

「喫茶店に寄っていいっか」

アイドルの提案が全員一致の賛成を受けて、俺たちは駅から少し離れたところにある喫茶店に向かうことにした。これは周防の行きつけの店で、俺も二度ほど付き合ったことがあるのだが、妙齡の美女が一人で経営しているこぢんまりとしたところだ。大体いつも閑古鳥が鳴いているので、だらだらと喋るのに適した場所である。

少々細い裏路地を通り「結局俺と周防は何もしてねえな」という大塩の言葉に全員が笑ったときだった。

既にリーダー格だったアイドルが先頭を進み、それにユウコが並ぶ形だったのが不味かった。裏路地はあんまり治安が良くなって、いわゆる不良とかアウトローとか呼ばれる人間がたまにたむろしていることを失念していた。

なんせ、キラキラ成分に関してはこれらの女優に引けを取らないアイドルである。柄の悪そうな男共が放っておくわけがなかった。

「よお、俺たちと遊ぼうぜ」

そんな言葉をかけながら近づいてきた金髪の男が現れるのも、あの意味では仕方のないことだったのかも知れない。

アイドルが驚いたように身体を竦ませて、次に俺を振り返った。何も言わなくても「助けて」と目が言っていた。

すまんアイドル。そんな目をしてても意味が無い。俺は基本的に友達甲斐の無いヤツだが、幼少から現在に至るまで正義の味方に憧れて生きてきた男だ。助けてと言われなくても勝手に助ける。

「ねえ、そいつらほつといてさ。いいところこうぜ」

不用意に男がアイドルの肩に手をかけようとする。それをユウコが思わず手でピシヤリとはたいていた。

「いつて。何すんだよ！」

「邪魔」

ユウコおそるべし。柄の悪い男にひるむこともなく、まるで汚いモノを見るかのように冷たい目で男を見据えている。

後ろには数人の男が控えているというのに、流星は俺の未来の恋人だ。恐れを知らない。

「てめえに用はねえよ！」

「ッ！」

男があるうことが、ユウコを要らないという不埒な発言を力ました瞬間に、俺の体温がぐんと上昇した。

その女はな、俺が心の底から愛してやまない女なんだ。貴様のようなゲスにてめえ呼ばわりされる安い女じゃねえんだ。

ブチ切れそうになったところで、男がユウコを押そうとして腕を伸ばした。それをユウコが咄嗟に避けようとしたのだが、狭い路地だ、ユウコの髪の毛に男の手が一瞬触れてしまった。

ブチ切れそうになった、というのは少々語弊があったらしい。その瞬間に既に俺は地面を蹴り、アイドルとユウコの隙間から男に飛びかかっていた。とつくの昔にブチ切れていたのだ。

「ライダーキーーーーーック！」

長年磨き抜いた必殺の一撃。身体を捻り、両脚でドロップキック

気味に敵に突貫するRX仕様だ。

無理だ、無理だとわかりつつも練習を重ね続けた結果、この見た目重視な一撃に威力を見出すことに成功した、俺のとびきりの一撃である。

モノの見事に男は吹っ飛び、近くにあったポリバケツに頭から突っ込む。

「金池君！」

「カナブン」

アイドルとユウコがぱつと顔を輝かせて俺に駆け寄る。二人とも無事のようなが、こんなこともあるのかと常にポケットに忍ばせていた除菌ウエットティッシュをユウコに渡す。

「手、拭いておけ……あんなヤツの手を触っちゃっただろ」

これは決まった。なんてかつこいいんだ俺。ワイルドにして紳士的。これぞ男の鏡であろう。

俺の男気に見とれたのか、ユウコがぱかんとした表情で俺を見る。見つめ合うと恥ずかしいのでアイドルの様子を確認すると、アイドルはよほど怖かったのだろうか、俺に抱きついてきた。

「あのときと、一緒だね」

「ああ。俺は正義の味方だからな」

それ以前にユウコの味方であり、もしもユウコが「私は悪」でも言おうモノなら俺は即刻趣旨変えを敢行して「悪の味方」と称することになるのだろうか。

ちなみに、アイドルの言う「あのとき」というのは、多分小学生の時のだろう。俺が結果的にアイドルを助けたという事件であるが、確かに今回もアイドルが結果的に助かる形になっている。

まあ、アイドルも今やカナブンチームと言っても差し支えない、いつもの顔ぶれとなりつつある。困っているのならば助けるのは当然と言えよう。そう思っただけで一人頷いているときだった。

「危ねえッ……」

大塩の叫び声と同時に、がっんと後頭部に衝撃が走った。

なんだ、と思う前に身体ががくりと崩れて、倒れ様に振り返ると、金属バットを持った男が俺を見下ろしていた。

「へへ、ザマアミロ」

「ぐぬ……ッ」

ぐらぐらと脳が揺れる。どうやら傷が出来てしまったらしく、生ぬるい感触が頭皮を伝った。

「か、金池君……！」

外傷を見慣れていないのだろう。アイドルが悲鳴を上げる。ユウコは呆気にとられたように立ちすくんでいた。

ずきずきと後頭部が痛く、流石に立ち上がれそうもない。

だがまあ、大丈夫だろう。何せ、ヤツがいるのだ。

「……後は、任せた」

それだけを呟く。アイドルとユウコの顔が、自然と周防の顔に向かう。

だが、俺の言葉に反応したのはその隣にいた男だった。

「任せろ金池。仇討ちだゴラァ……！」

大塩信、十七歳。

その容姿とおちゃらけた雰囲気とは裏腹に、喧嘩は滅法強い。

周防がアイドルとユウコを護る形で、そのアイドルとユウコが俺の介抱をしてくれるという夢の時の中、一人の男が奮闘していた。

十人はいる不良共に何の躊躇もなく突っ込んでいき、ボコボコと金属バットで殴られるのもお構いなしに手近にいる人間から殴りつけていく姿は、まさしく武蔵坊弁慶の如くである。

「食らえ！」

金属バットを振りかぶった男が、大塩の脳天にめがけて振り下ろす。モロに命中して男がニヤリと笑うが、殴られた大塩もやっぱりニヤリと笑うのだった。

「いてえなアホ！」

俺ですら一撃で昏倒するような攻撃を「いてえ」で済ませてしま

うのは大塩ぐらいのものだろう。アル中の親父に殴られ続けてきた大塩の打撃耐性は異様に高いのだ。どれくらい高いかというと、メタルスライムぐらいだ。

鋼の剣でも倒せない大塩を、高々金属バットで倒そうとするのが間違いである。

「なんだよコイツ、おかしいぞ!!」

「いい加減倒れるよ!!」

ボカスカと殴られる大塩だが、避けるのが面倒というアホを通り越して清々しい理由で全てを受け止め、全力で攻撃しているおかげで隙だらけの男の金的を躊躇無く蹴り潰す。

「チェーンソーでも持ってこいやゴルフ!!」

金属バッドで青痣一つ作らない男に、果たしてチェーンソーでもダメージが通るのかは謎だが、少なくともそれぐらい固いという印象が相手方にも伝わったようである。ならば急所攻めだ言わんばかりに金的や目潰しを狙いに来るのだが、基本的に「ぐしゃっ」とか「ぬちゃっ」という形容詞が使われそうなので、どうしても腰が引ける。

そんな及び腰の男など大塩の敵ではない。間合いという概念を必要しない大塩は、相手が躊躇う間にもどんどん突き進み、ぼこぼこと相手を殴りつける。

「てめーらが小早川さんに声かけるなんざ百年早えよダボが!!」

「オマケに高山に殴りかかるとか、てめーらタマついてんのか。男がすることじゃねーよトンチキ!!」

「金池はアレで繊細なヤツなんだぞ。これ以上忘れっぽくなったらどうすんだボケ!!」

色々と過激な発言も飛び出してくるが、真ん中の台詞だけは全面的に同意だ。ユウコを殴ろうとするなど、タマのくつついた男のすることではない。タマを蹴られて悶絶しているヤツがいるのは、あれだ。痛いフリをしないと無いとバレてしまうからそうしているのだろう。

「す、すごい……大塩君」

「やるな、シオシオ」

いつの間にか大塩の株が上がっていた。ユウコも渾名を思いついていたのだろう。なんというか、こう、しおしおと萎え萎んでしまいうような渾名だが、俺がカナブンという庶民派なのだから、ヤツがシオシオというしょっぱい渾名なのも仕方のないことだ。

「終わったか」

暢気にアイドルの膝枕なんぞで休憩していた俺に、周防がにこりと笑いかけた。

大塩はパンパンと手を打ち鳴らし、一仕事終えたというゼスチャ―。血どころか、痣の一つも出来ていない。

「お疲れさん」

「おうよ、金池も良いライダーキックだったぜ。俺以外のヤツなら大抵一撃で倒せるぐらいだ」

ぐつと俺の手を握った大塩が身体を引き上げてくれる。アイドルがハンカチで抑えてくれていたおかげで出血も既に止まり、少々足下がふらつくが問題なさそうである。

「病院、行こうよ。金池君も……大塩君も」

アイドルは流石に心配なのか、散々に殴られた大塩にも近づいてペタペタと身体を触り、異常がないかと確かめている。

大丈夫だアイドルよ。お前がそれだけ触れば、ちよつとは痛いと感じていたのも気にならなくなる。

「俺は全然平気だ。まあ、金池は流石に病院に行った方がいいかな」

大塩がヘラヘラ笑いながら俺を見る。

数十発食らって平然としている大塩が笑っているのに、一発食らっただけの俺が顔を顰めているのが少し悔しい。

「カナブン、大丈夫か？」

「治った」

ユウコが少し心配そうに、上目遣いで俺を見てくれたので怪我は

完治した。

既に傷口はふさがり、頭もいつになく冴え渡っている。なんせ俺の隣には俺を案じるユウコがいるのだ。

骨折でも二秒で治る。死んでも灰から蘇るぞ。

後日、仁科先生に顛末を語ったのだが、教師として暴力を咎めるのではなく、女性陣を護りきったことを褒めてくれた。

「俺も千晴が絡まれたときは、ボコボコにされたが護ったしな。ああ、でも俺にもツレがいて助けてくれてな。伊達と高木ってヤツなんだが——」

このときはその高木というのが、俺のよく知る人物だとは知るよしもなかった。

a c t 4 ・ 道草奮闘記（後書き）

一年ぶりの更新。

黒衣終わらせたい、ようやくです。

まあ、今回はその黒衣のキャラが出張してくるわけですが。

学校帰りにアイドルと二人で帰っていると、見慣れた顔と出くわした。

「やあ、ブンタ」

「ちつす、サムライさん」

今日はユウコと俺の美しい恋愛物語ではなく、風変わりで歳の離れた友人の話をしようと思う。

サムライさんは近所に住む背の高い男で、今年で二十五歳になるという。

職業は鈴ノ宮出版の編集者。文芸部門の編集者で、いわば小説家と協力して物語を作り上げる人間でもある。

鶴のように細い体躯と、銀縁眼鏡。地味ながら整った容貌をした中々に渋い男である。

もともと、俺が小学生ぐらいの頃から顔をよく合わせていたので、いまだに近所の兄ちゃんという印象はぬぐえないのだが。

「仕事帰り？」

俺が尋ねると、サムライさんは首を横に振って「工作中さ」と答えた。なんでも、近所に小説家の卵がいるとかで、その人の担当編集に任命されたとか。

今から初顔合わせなのだという。

「まだ高校生なんだけどね。豊かな才能の持ち主だ。まあ、見た目もかわいらしい女の子らしく、これは是が非でも担当したいと思ってるね」

サムライさんはニヤリと口の端を吊り上げて、スーツの内ポケットから煙草を取り出した。

「道端だぞ」

「ああ、そうだった。待ち合わせまで時間があるからな……ブンタ、少し付き合ってくれ。よければ、恋人と一緒に」

サムライさんは俺と、隣で不思議そうに首をかしげていたアイドルを見て笑う。

「恋人じゃねえよ。まあ、俺は暇だしいいけど。アイドルはどうする？」

「ふふ、恋人があ……うん、私も行くよ」

流石はアイドル。他人の失礼な思い違いにも強靱な精神力で笑顔を作るなどお手の物らしい。まるで心から喜んでいるように見えるのだが、それができねば超のつく美人であるアイドルは、嫉妬やら逆恨みなどの負の感情に潰されてしまうのだろう。

「じゃあ、僕の家招待しよう。ここからすぐ近くなんだ」

サムライさんの家は築数十年のオンボロアパートだ。

オンボロアパートとは言っても、どちらかというと下宿屋に近い。つまり、居間やトイレ、風呂などは共用で、借主は個人部屋のみを間借りしている形である。

陽桜荘という名の下宿屋の居間に案内されると、アイドルは物珍しそうにきよろきよろと周囲を見渡した。俺はすでに何度か来たことがあるので、勝手知ったるところだ。

「あ、マサト。おかえりー。ブンタ君もお久しぶりだね」

サムライさんがコーヒートを要れようと隣接する台所に入ったところで、日本人とは思えない赤い髪をショートカットにまとめたお姉さんがひよつこりと顔を出した。

下宿屋の住人で、サムライさんの恋人である……名前を忘れた。年上なのだが妹っぽいので妹さんと呼んでいる。

「そっちの子はじめまして。エリシア・フォウルスです」

「あ、はい。小早川雫です……」

「シズクちゃんだね。マサト、コーヒーは私が淹れるよ」

「そうか、ありがとう」

妹さんは面倒見の良さそうな笑顔で台所に入る。代わりにサムライさんが戻ってきた。

「いや、待たせてすまない。ブンタ、最近はどうだ？」

「そうだなあ。料理部に入ったらいきなり副部長に任命された」

「ほう。確か陽桜高校だったな。ということは、顧問は仁科だろう？」

「え、仁科先生を知ってるのか？」

「親友でな。なんだ、不思議な縁だな。ブンタの顧問だったのか」

サムライさんは嬉しそうに笑い、煙草に火をつける。吸い始めたのは大学に入る前という。

「あの……サムライさん？」

アイドルがおずおずと声をかける。サムライさんはふとアイドルを見て、それから苦笑した。

「ああ、そういえば自己紹介がまだだった。僕は高木聖人。ブンタがサムライさんと呼ぶのは、まあ渾名のようなものだよ」

「あ、そうだったんですか。てっきり、剣術の先生か何かだと思いました」

「はは。そんな大層な腕前じゃないさ」

暗に剣術がそれなりに使えることを示唆しながらも、サムライさんは笑う。

妹さんが五人分のコーヒーを淹れて戻ってくると、再びアイドルが首をかしげた。

「五人分？」

「うん。フィアも呼ばないとね」

妹さんはそれだけ言ったときに、ちょうど居間に一人の女性が現れた。

長くウェーブがかった金髪の、サムライさんと同じ年頃の美人で、気の強そうな凛とした目をしている。

「ブンタじゃないの。来てたなら言いなさいよ。あ、そっちの子は

恋人かしら」

フィアと呼ばれた女性——本名は長いので覚えていない。

「アスタルフィア・エルヘルブムよ。よろしくね」

そう。そのツンデレさんである。彼女はサムライさんの恋人で、妹さんの姉のような存在でもある。

ここでひとつ、誤解を解いておかねばならない。

サムライさんの恋人という二人の女性。妹さんとツンデレさんであるが、別に二股をかけているわけではない。

正確に言えば、ほかに純日本人のアイドル並の美人さん。青い髪 of 巨乳さん。上品で清楚な王女様と、五股をかけている。

「人聞きの悪い。全員納得の上でのこの形だ」

サムライさんは笑いながら言うが、アイドルはぽかんとしていた。俺だって最初は驚いた。およそモテるタイプではないサムライさんに、美人が五人も惚れ込んでいるのだ。なにやらいろいろな事情で全員に惚れられ、一人を選ぶことができずに全員とくつついてしまったという。

ユウコー筋である俺にしてみれば、これはもう軽蔑の対象でもあるのだが、恋愛とは人それぞれ形が違うものらしいし、サムライさんも相当に悩んだ結果、この状況が一番全員にとって幸せだという結論に至ったという。妹さんやツンデレさん。ほかの三人も納得済みらしく、だとすれば浮気や五股というよりも、一夫多妻という言葉のほうがつくりくるだろう。

「は、はあ……すごいんですね」

アイドルがいまだに信じられないという様子で、妹さんとツンデレさんを見る。

「最初は、なんだか変かかって思ったんだけど……えへへ。みんなと一緒にいたいから」

「……正直、一緒にいる時間が長すぎたのよねえ。狭い馬車で身を

寄せ合つて、三つぐらい世界を飛び越えて……

馬車やら世界を飛び越えるやら、なんともファンタジーな話である。アイドルは冗談かと思つて愛想笑いしているが、俺は中学生の頃にすっかりサムライさんの召還魔法に巻き込まれてシーガイアとかいう世界に連れて行かれたことがあるので、これが本当のことだと知っている。

サムライさんと、サムライさんの親友である勇者っぽい騎士と俺さらに妹さんやツンデレさんたちと別世界からやってきた魔王を倒したのも、今となつては懐かしい記憶である。

「そうそう。リツカがブンタに逢いたいって言つてたわよ。たまには顔を見せてあげなさい」

「リツカか、また一緒に風呂とか言い出さないだろうな」

「いいじゃない。おねーさんに背中流してもらいなさいよ」

ツンデレさんが楽しそうに笑い、サムライさんの背中を後ろから抱きかかえる。リツカというのはシーガイアで何かと俺の世話を焼いてくれたお姉さんで、唯一、俺が名前を覚えた異世界人でもある。まあ、妙に裸で迫ってきたりするが、基本的にはいい人だ。

「……金池君？」

アイドルが空恐ろしい目で俺をにらんでいた。

流石に現代日本で「お姉さんに背中を流してもらう」というのは不味かつたかもしれない。うっかりこのことがユウコにバレたら大変である。

「ああ、小早川さん。ゲームの話だね。黒衣のサムライというゲームなんだけど、知らないかな？」

サムライさんが渋い声でアイドルに尋ねる。アイドルが「ゲーム？」と首をふるふると横に振つた。

「多人数参加型のオンラインゲームだね。まあ、僕やブンタ達は少し前、ずいぶんとそれに熱中していたんだ」

流石はサムライさんである。この人の唯一最大の武器、口八丁は悪魔ですら騙してしまうと評判なのだ。

年上で貫禄のあるサムライさんの言葉は、それだけで説得力がある。アイドルは「そうだったんですか」と微笑を取り返した。

「ふむ、久々にゲームも悪くないか。ブンタ、そのうちログインするから君も一緒にどうだ。リツカもだが、ファウストが君に魔法を教えたがっていた。なんでも、ひとみに次ぐ才能の持ち主だそうだ」

「あの人の講義、眠たくなるんだけどな」

「まあそう言うな。あれはあれで良い男だ」

サムライさんは静かに笑い、懐かしむように目を細めた。

a c t . 5 黒衣のサムライと小説家の卵 1 (後書き)

出典：黒衣のサムライ

しばらく談話を続けていると、サムライさんは「仕事だ」と言つて席を立つた。

「中々面白い文章を書くらしい。嘉納妙かのつたえという子なのだけどね。会うのが楽しみだ」

嘉納妙。サムライさんが担当する小説家の卵のことだろう。

しかし、その名前には聞き覚えがあつた。

「嘉納……妙？」

「妙ちゃん？」

俺とアイドルがぼつりとつぶやく。

妙ちゃん。ああ、そうだ。小学校からの同級生で、確かそんな名前の子がいた。

「なんだ、知り合いか？」

「ええ。中学校まで一緒に……金池君も覚えてないかな？」

「覚えてるぞ。仲良かったからな」

もともと、推理小説が好きな俺と、小説を書くのが好きな嘉納とは話が合つた。中学一年生の頃に同じクラスになり、よく図書室で彼女の小説を読んで感想を言つていたものである。

中々愛らしい容姿をしていたのは確かで、サムライさんの食指が動くのも致し方ない。

「じゃあ、ブンタ。アンタも一緒に行きなさい。マサトが変な色目使わないように見張つててね」

「ん、まあ昔のツレに会っただけだからいいんだけどよ。サムライさんにとつちや仕事だろ。俺がついていくのはアリなのか？」

ツンデレさんの言葉に、サムライさんを見ながら尋ねると、サムライさんは「かまわんだろう」と答えた。

「別に色目を使うつもりは毛頭ないのだが、仕事と言っても今日は初顔合わせで、概ね仕事というよりも懇談会のようなものだ。お互

いを知るブンタがいれば会話も円滑に進むだろう」

「ん。じゃあ俺は行くか。アイドルはどうする？」

「ごめんね。私はちよつと用事があるから、先に帰るよ。妙ちゃんによろしく言っておいて」

何でも、弟の宿題を手伝う約束があるらしい。俺も妹の宿題を世話することがあり、それによつて兄は偉大な存在であると思わせているので、無碍にさせるわけには行かない。

「では、そろそろ行こうか。小早川さん、また機会があればゆつくりと喋ろうか」

「は、はい……金池君と一緒に来ますね」

アイドルは少しサムライさんが苦手なのかもしれない。

アイドルを見送った後、俺とサムライさんはてくてくと近所の喫茶店に向かつて歩いた。

ついこの間、みんなで行った喫茶店である。どうやらサムライさんも常連のようで、嘉納も場所を知っているので、そこでゆつくり話をするらしい。

行く道々、最近のサムライさんについてあれこれと聞く。

どうやら美人さんと結婚はするようだが、他の四人とも関係は続けるらしい。

「一応、シーガイアではフルちゃんと結婚しているのだが……まあ、ファイア達がそれでいいと言うのでな」

「いいんじゃないかな。全員がそれでいいのなら」

俺はユウコー筋であり、ユウコーへの愛が強すぎて目移りなんてしないが、サムライさんが全員に等しく惹かれ、全員から等しく好かれてるのは俺もよく知るところである。

それに、シーガイアでは一夫多妻が貴族などでは認められているし、サムライさんはそのためにわざわざ爵位を手に入れている。魔王討伐の恩賞でサムライさんは爵位という名の「一夫多妻の許可を得たようなものである」。

ちなみに俺はシーガイアの大国リガルドにおける、帝都での永久居住権なるものを所持しているが、ユウコと結婚したときに別荘地として活用するつもりでいる。人間、何事もこなしておくべきだ。すべてはユウコにつながるのだから。

「……ブンタも年頃か。さっきの子がお目当てではないようだが」

「おう。まあ仁科先生にでも聞いてくれ」

「あの馬鹿たれは、生徒の恋愛にまで首を突っ込むか」

サムライさんは呵々と笑い、喫茶店の扉を開く。妙齡の美人マスターが俺とサムライさんの姿を認めて、奥の席でちょこんと座っている女の子を指差した。

「もうとつくに来てる。若い女の子を待たせるものじゃない」

「客に対して無礼な口だ……旦那の顔が見たいものだ」

サムライさんが笑うと、マスターもふと笑みをこぼす。どうやら知り合いのようだ。サムライさんいわく、かつては陽桜高校のスケ番と呼ばれた無敵の女史らしい。

奥の席へと進むと、中学時代よりもぐつとかわいらしく成長した嘉納妙が座っていた。

俺が名前を覚えていた数少ない人間の一人で、中学校からの友人では嘉納と、もう一人ぐらいのものである。もう片方は中学時代に一時期、同じ塾に通っていた女の子で、どこかこのマスターと雰囲気がよく似ている。

雪吹実代という変わった名前だったから覚えたのだが、彼女もまた小説をこよなく愛する変人だった。同じ高校に進んだのでたまに連絡もするほどである。

「はじめまして。君の担当編集者になった高木です。よろしく」

「よお、嘉納ちゃん」

「あ、はじめまして……あれ、金池ちゃん？」

お互いに苗字にちゃん付けで呼ぶのが、俺と嘉納の流儀である。何故かそういうことになってしまったのだが、慣れとは怖いもので、

久しぶりの再会でもすぐにその呼び方が出てきた。

「ブンタとは昔からの付き合いだね。たまたま話に君の名前が出て友人だというから連れてきた」

サムライさんは嘉納にとって予想外であろう俺の出現を説明してマスターにコーヒーを注文した。

俺はとりあえずサムライさんの隣。嘉納と向かい合うように座り、久々の嘉納の笑顔を堪能する。

「前より可愛くなってるな」

「金池ちゃんが私を褒めるときは、別に好きな子がいるときだね」

「おうよ。そうでなきゃ軽々しくこんな台詞、言えねえからな」

「あはは。どうしてこんな男ばかりなんだろ」

嘉納は笑いながら溜息をつくという難易度の高いウルトラCをかましつつ、改めてサムライさんを見た。

「嘉納妙です。これからよろしくお願いしますね」

「ああ。既に原稿は読んでいるが、とてもいい文章を書くね。ただし、売り物になるかは話が別だ」

サムライさんはふと柔らかい声音から、急に抜き身の真剣のように鋭い言葉を放った。この人の十八番で、途端に嘉納の笑顔が陰りを見せる。

「自分で書いたものだから、いくらか想像がつくだろ。如何せん、主人公に魅力がない。男性視点の物語を、若い君がここまで書き上げるのは相当に苦労したのだろうし、才能も十二分にあるとは思うのだが、いまいち若い男としての迫力がない。いつそのこと、最初から書き直してみるといいと思う」

仕事の話はしないと言いながら、自己紹介もそこそこにこれである。この人の嘘には慣れているが、よくもまあ舌の根乾かぬうちからこんなことが言えるものだ。

「……なるほど、そういうことですか」

しかし、俺の予想を裏切って嘉納はにこにこ笑顔を見せた。とたん、サムライさんの顔も明るくなる。

「ブンタ。君は自分の欠点がわかるか？」

「んー、名前が覚えられないところかな」

「ふむ。それもあるが、一番の欠点は馬鹿だということだ。そして、それは君の最大の長所でもある。若い男の迫力とはつまるところ、どれだけ馬鹿かということだな。僕も昔は馬鹿な真似を色々したものだ」

サムライさんが俺の肩をポンと叩いて、嘉納を見る。

「そういうわけで、参考資料として金池文太を提供しよう。ちょうど恋愛中のようだし、取材すればいい。何なら、嘉納さんがアドバイザーなり助力なりで、彼の恋愛をサポートしてもかまわない」

「……ノンフィクションを書け、ということではないですね。あくまでも、金池ちゃんを元にして、主人公像を確立して……好みの展開に仕上げていく、と？」

「ああ。ブンタにもそろそろ恋愛のアドバイザーとして女性をつけてやったほうがいい年頃だろうしな。そういうわけで、一ヶ月ほど取材してみる」

少し、雲行きが怪しくなってきた。

なぜ、俺が嘉納に取材されねばならんだ。そもそも俺は偶然サムライさんと行き会い、たまたま嘉納と知り合いたということが知れて、その場の流れでここまで来ただけの存在である。

しかし、サムライさんはまるで俺の存在がなければ成り立たないような話を進めている。しかも、雑談で終いのはずの初顔あわせだというのに、取材の命令をしてしまうなど、かなり怪しい。

これではまるで、俺が騙されて連れてこられたよう——！！

「サムライさん、謀ったな？」

「ああ、今頃気がついたか。大体、少し考えれば想像がつくだろう。妙のプロフィールは担当編集の僕が当然把握しており、君の通っていた中学校と一緒に気づくのも当然のことだ。後は、学校帰りの君を捕まえて、それとなく話を振ればいい。妙と知り合いならば連れて来るのも容易いし、知り合いでなければ、この場で仲良くさせ

てしまえばいい。とにかく、乗りかかった船なんだ。おとなしく取材される」

やられた。

わかつてはいたが、サムライさんは悪魔ですら騙してしまうような男なのだ。実際に悪魔を騙した経験すらあるので、もう折り紙つきといっても差し支えない。

そんなサムライさんが何の意味も無く、ただ旧友だからという理由で俺を仕事の場に連れてくるだけで疑問を覚えるべきだったのに。「それにな、妙は見てのとりの美人だ。おそらく恋愛経験は中々のものだろうし、いいアドバイスがもらえるぞ。意中の人間ともきつと急接近できるに違いない」

「よっしゃ、存分に取材しろ。そして俺とユウコを急接近させてくれ」

これはもう、間違いなくサムライさんの甘言なのだろうが、それでもユウコとの仲が少しでも縮まるのであれば、それに越したことは無い。

いや、どうせならば自分の力だけでユウコを振り向かせたいのだが、ユウコという太陽の化身が俺の如き凡夫に興味を持ってもらうためには、少々の絡め手も必要なのだ。事実、料理部に入ったり、色々と行動を共にすることは増えてきたのだが、こう、恋愛的意思で距離が詰まっているかといえば、まったくもって詰まっていな

い。こうなれば、悪魔に魂を売る覚悟でサムライさんの言葉を鵜呑みにして、嘉納という強力な助っ人を手に入れたほうが早い。

「……わかりました。金池ちゃん、よろしくね」

「おうよ！」

嘉納が真剣な目で頷き、俺がそれに笑顔で応える。

サムライさんだけが、いかにも楽しそうな目で俺たちを見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1873f/>

ガンホー・ラヴ！

2010年10月9日04時04分発行